

かざいと

CROSS OVER ～21世紀への連帯～



50th Anniversary

福岡高校ヨット部OB会

福岡高等学校ヨット部々歌 (讃歌)

坂口幸雄 詩
吉野信夫 曲

一、玄海灘に生まれたる
ヨットマンなら
男なら
太平洋に夢はせて
福高男児
ふるいたて

二、はらむセールを尚
引けば きしむ
マストのこゝちよさ
腕まえ見よと
タックジャイブ 夕日が
沈む 志賀島

三、だれか忘れん
霜月のりゅうかと
ばかり吹き荒れる
語る言葉も今はなく
恨みはふかし
博多湾

四、飛沫を肩に海の子が
みんな一度はあこがれた
海のなさけの
優勝旗今も思えば
目が潤む
目が潤む
目が潤む

♩=120 たくましさを持って

The musical score is written in G major (one sharp) and 4/4 time. It consists of ten staves of music. The lyrics are written below the notes. The score includes various musical notations such as dynamics (mf, mp, f), articulation (accents), and performance instructions like 'Tempo 1' and 'D.S.'. The lyrics are:
 1. けんか いせ なだに うまの れの たけ
 2. はらま ーか だんた にを なり まのみ 引の
 3. ひま ーを ーを ーを ーを ーを ーを ーを ーを
 るばが ヨットマン マーイ ンスち なたの らの おこ とこ ちが なよれ
 らまた たうり いでの いえな よみさ う上げ にとの ゆたゆ めくら はジャ せい
 ぶき ふたい く こ日 がむ だんす じむば ーは ーは ーは ーは ーは ーは ーは ーは
 て ま
 3. だれかわす れんし もづきのりゅう
 かとばかり吹きあれる
 かたることばもいまはななくうら
 みはふかしはかたわん
 D.S. む め が り る む

もくじ

<p>Ⅰ 創部50年を祝す …………… 福高ヨット部OB会長 平畑栄一 …………… 1</p> <p>50周年事業にあたり …………… 50周年事業実行委員長(二十二回) 田代剛 …………… 2</p>	
<p>Ⅱ ヨット部創立50周年によせて …………… 福岡高校校長 野見山義隆 …………… 4</p> <p>福岡高校ヨット部創立50周年によせて …………… 福岡県ヨット連盟副会長 秋山雄治 …………… 5</p>	
<p>Ⅲ 海 想 語 録</p>	
一回生の初乗り ……………	初代顧問 志賀史光 …………… 7
祝五十周年 ……………	二代顧問 安東治 …………… 9
OLD DAYS ……………	一 回 小林龍太郎 …………… 9
質屋の初体験 ……………	一 回 小河亀彦 …………… 10
福高ヨット部OB会 ……………	四 回 河原政明 …………… 11
懐想 三題 ……………	四 回 辰巳詢二 …………… 12
スナイプへの鎮魂賦 ……………	四 回 辰巳詢二 …………… 14
海想語録 ……………	十三回 安河内千洋 …………… 20
スナイプと私 ……………	十六回 清水道雄 …………… 22
ゼロゼロセブン ……………	十七回 坂本大司 …………… 24
真夏の夜の夢 ……………	二十一回 伊藤元晴 …………… 27
最近感じること ……………	二十二回 田代剛 …………… 27
27番目の夏 ……………	二十七回 小江豊 …………… 30

事務局からのお願い	O B会事務局	三十一回	井手洋隆	33
三十三回キャプテン永田雅之氏の思い出	新	正樹	33	33
現役時代 復刻版(平成5年4月)					

計画書	四十三回	取違	剛	36	
健闘を祈る	四十三回	古屋	剛太	37	
三年間の思ひ出	四十三回	佐土嶋	孝文	38	
三年間を終えて	四十三回	中村	賢一	38	
回想記	四十三回	織田	順之助	39	
いい思い出	四十三回	福沢	綾乃	39	
仲間たちへ	四十三回	池田	陽子	40	
【三年生】	四十四回	大場	慎一	ほか十名	40
【二年生】	四十五回	吉田	茂	ほか五名	44

◆ 福高ヨット部50年の歩み 46

IV 追悼 故岩石泰忠先生

岩石先生の思い出	十八回	石橋	眞一	51
故・岩石先生の思い出	十八回	北本	純二	52
海の香り	十九回	高須	修平	53

V 現役の時

活動状況について	現顧問	波多野	泰彦	55
----------	-------	-----	-----	----	-------	----

◆ 編集後記

..... 74

VI

住所録

1. 学校関係	63
2. O B	64
3. 現役	73

ヨット部前顧問として	前顧問 (三十一回)	久保聖志	56
ヨット部で得たもの	前キャプテン	副島健太	57
海の経験	堤幸太	58
チームとして	佐藤太作	58
苦しみを乗り越えて	津留真哉	59
三年間を振りかえって	祝井健志	59
秋の足音	斉田涼平	60
誇り	新キャプテン	嶋田諭	61
(一年一言)	清水紘太	61
	黒木旭	61
	井上修治	62
	加治真	62

I 創部50年を祝す

OB会会長 平 畑 栄 一

昭和二十四年、同好会として名島で産声を上げた母校ヨット部が幾多の困難を乗り越え、ここに創部五十年の記念すべき日を迎えるに至ったことに大きな感動を覚えると共に、この輝かしい伝統を築いて頂いた諸子に深く敬意を表します。

五十年の歴史の中で、多くの少年が福高ヨット部に集い、セーリングに若き日の夢を追い求め、燃焼し、充実した高校生活を堪能し、青春の証を持って巣立って行きました。その少年達も時の流れとともに、学生として或いは社会人として全国各地で各分野で、社会の担い手として活躍の程を耳にし慶びにたえません。

いまヨット部五十年の歩みを静かに振り返るとき、余りにも多くの事が脳裏をよぎり、語れど語り尽きせぬものがあります。

第三回国体使用のスナイプ艇でのスタートで、何とかヨット部らしくと艇数の確保に奔走した創部期。九大の指導、修猷の友情がありました。

定住する艇庫がなく百道・地行・須崎・箱崎・名島汐湯・香椎浜・大岳とさまよったジプシー時代。それぞれ思い出も格別です。

その間OBとして熱心に後輩の面倒を見た献身的な会員。OB会の組織もなく、その努力も大きなパワーとならず虚しかった日々。昭和四十二年にはOB会が発足、ニックネームを「ぼんくら会」とし本格的な活動を始めました。発足直後の昭和四十五・四十六年、インターハイ・国体での全国優勝。感激の祝杯でOB会活動にも弾みがつきました。

さらに機関誌「かざいと」の発刊。「ぼんくら一世」号から「ぼんくら十一世」号までOB会による艇の建造。創部三十年記念の艇庫・合宿所の建設。創部四十年記念の祝賀会。毎年十一月三日の追悼式と現役との交流会。などOB会として大きな足跡を残す事ができました。その中でも艇の建造に永年OB会が関わってきた事は大きな事業として、大いに誇り得る事と思います。これも会員各位の母校ヨット部への「愛着・想い」とOB会活動への御理解と御協力の賜と深く感謝致しております。

また残念な事ですが、この五十年に至る間に八名の会員が人生半ばで逝きました。この中には昭和三十三年十一月三日・末永隆一君の遭難があります。OB会未結成時の事故で会として十分に対応出来なかった事を申し訳なく思います。毎年十一月三日の「追悼式」はこの教訓を生かす意義あるものです。またヨット部発足以来、多くの先生方に顧問教師として御努力頂きましたが、永島先生・岩石先生の訃報も、その期にお世話になったOB

会員には悲しい事でした。ご冥福をお祈りします。

ヨット部諸君の活動をまのあたりにして思う事は、かつての先輩が連続全国制覇の栄光を手にしてから久しく「快報」に接していない事です。寂しいものです。いつの日かこの「快報」を私どもに届けて下さい。その目標目指して一層の奮起・努力を望んで止みません。そのために若いOB諸君の積極的な関わりが必要かと思えます。「ぼんくら」号で育った若い世代のOB会員が自分達が果たせなかった夢を後輩諸君に託すべく行動を起こして下さい。期待しています。

また、今後の飛躍を考えた時に幾つかの問題があります。まず、活動拠点が小戸で地理的条件の問題があります。これは福高の宿命です。現役諸君の熱意・努力での克服以外にないと思えます。また創部時に比べ社会情勢の変化、価値の多様化、高校生気質の変化、さらには公立高校の部活動の問題等いくつかの課題が考えられます。が長期的展望のもと関係者の協力で克服して行きたいものです。また、ヨット競技レベルの向上、競技方法の変更等で個人競技的側面が強くなってきたようですが部活動としては個人主義に陥る事なく「福高ヨット部」の部員としての「連帯感」を更に強め、伝統につながる活動を目指し奮起されん事を期待して止みません。

創部五十年“OB会員諸君は勿論、学校当局、歴代の顧問の先生方、ヨット県連関係者各位、各校ヨット部

の皆様、現役諸君とその活動を支えてくださった家族の皆様、母校同窓会・スポーツ振興会の皆様等々余りにも多くの方々に支えられて今日に至りました。只々感謝の念で一杯です。

今後とも、二十一世紀に夢を託したヨット部の少年達の躍動があると思います。福高ヨット部・OB会ともども、更に関係各位の御指導・御鞭撻の程をお願い致しまして創部五十年の挨拶とさせていただきます。

50周年事業にあたり

50周年事業実行委員長

田代 剛

皆さん今日は、福高ヨット部二十二回卒の田代剛です。このたび福岡高校ヨット部五十周年を迎えるという記念すべき大事業に際し、実行委員長という大役をおおせつかり、身の引き締まる思いであります。諸先輩が大勢いらっしゃるなか、私のような若輩者がどこまでお役に立てるのか、はなはだ心もとなく、諸先輩始め後輩皆様のご協力ご指導を賜りながら本事業を成功させたく、よろしくお願い申し上げます。

さて、福岡高校ヨット部は皆さんご存じのように創部五十周年を迎えます。一口に五十年といってもそこには

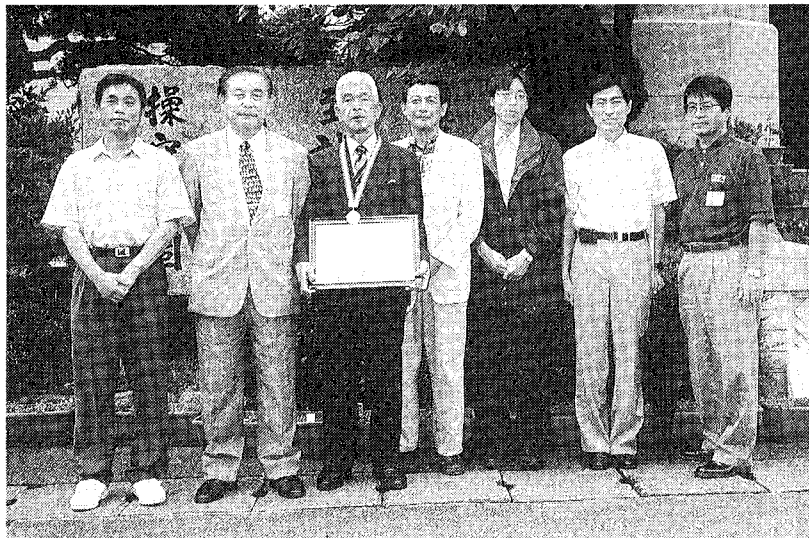
いろんな歴史がありました。

創部の時の生みの苦しみ、部員不足による廃部の危機、
遭難事故、そして栄光のとき様々な苦難や危機を力を合
わせ乗り越えられてきた諸先輩方のご努力に対し、ただ
頭の下がるばかりであります。このたびの五十周年に際
し、その歴史を紐解き、改めてOB全員が共通の認識に
立ってこれから未来永劫続くOB会の礎となる記念事業
になればと願っております。また、この誌上を借りまし
て諸先輩始め後輩の皆様、ヨット関係者の方々から、多
大なご支援、ご協力ならびにご奉仕賜りましたことをご
報告いたしますと共に、厚く御礼申し上げます。

平成十年七月六日



同窓会総会においてスポーツ振興会より
スポーツ功労賞を受賞する平畑会長



総会出席のOBとともに玄関前にて記念撮影（H10.6.14）

Ⅱ ヨット部創立50周年によせて

学校長 野見山 義 隆

ヨット部OBの代表の皆さんから、ヨット部が創立五十周年を迎えるから、記念誌を発行することになった。ついでには、原稿をよろしくと依頼を受けた。

筑豊の山の中で育った私にとって、ヨットとはこれまで一度も縁がなく、ヨットに関する知識は全く持ち合わせていなかった。とは言え、学校教育に於ける部活動で、ヨット部があるのは県立では、本校と修猷館で他に私立高校が数校あるくらいのことでは知っていた。

洋上で活動するスポーツは絶えず危険をとめない、部顧問の先生は大変だなと頭の下がる思いを抱き、校長として一度、ヨット部の活動を見に行かねばと思っただけはいるが、まだ実現させていない。

さて、原稿は依頼されたけれど、書くべき内容がなく困った。教頭に、ヨット部に関する資料はないかと、問い合わせたところ、「かざいと」というヨット部創部四十周年記念号をとりそろえてくれた。「かざいと」とはヨットの帆を繰るロープのことだろうと勝手に解釈し、ページをめくった。ヨット部の初代部長であった志賀史光氏が「ヨット部誕生まで」と題して寄稿してあった。本校のヨット部は、昭和二十四年に福岡国体で使用した

ヨットを払い下げてもらい、同好会としてスタートしたことや、払い下げに当たってはディングーとスナイプ二隻を申請したが、実際に払い下げられたのはスナイプ一隻であったことなどが紹介されていた。私には、スナイプとディングーの区別さえつかないのが残念である。

「かざいと」を読んで、本校のヨット部が創立五十周年を迎えることができたのは、ひとえに、部顧問の先生方の献身的な努力と先輩OBの方々の物心両面にわたる援助と協力の賜物であることがよくわかった。「かざいと」は楽しく読ませてもらった。生徒、顧問OBの活躍がいきいきと描かれ、まさに、部活動の真髄をかいま見たような気がした。

その中で、強く印象づけられた文章の一部を紹介したい。それは、ある顧問の先生が「何もできなかったけれど」と題して寄稿されたものである。

「では何故に、九年間も、ヨット部の顧問を引き受けたかというそれは、生徒たちの一生懸命頑張る姿に胸うたれたからに他ならない。進学校という苦しい環境の中で、部活を続け、厳寒の真冬にも出艇していく彼らの真摯な姿は、自分が何もできないだけに、よけいに私の心を打った。この生徒たちに私がしてやれることといたら、せめて顧問として面倒をみてやることとしかなかった。とても、顧問をやめるなどとは言いだせなかった。」部活動は学校教育においては教育課程外の活動であり、

実技の指導ができない運動部の顧問になることは、多くが敬遠するものである。この顧問の先生も、「技術的な裏付けのない私にとって、ヨットは一生懸命にやろうにも、やりようのないスポーツであった。」と気持ちを素直に吐露されている。しかし、生徒との関わりの中で九年間も顧問を務められたことに頭がさがる。

ヨット部のながい歴史のなかには、輝かしい実績もあれば不測の事故や不幸な遭難事件もある。海洋スポーツには遭難の危険性がつきまとうものである。初代部長の志賀史光氏は、海をよく知れば絶対に安全であるとおっしゃられるが、素人にはやはり一抹の不安を払拭できないものがある。

これまで大きな事故やたび重なる遭難にみまわれることなく、ヨット部が創立五十周年を迎えることができたのは、物心両面からのご支援をいただいているOB会の皆様のおかげであることを肝に銘じ、OB会のさらなる御厚情と、福高ヨット部のますますの発展を祈念して、挨拶いたします。

福岡高校ヨット部創立50周年によせて

福岡県ヨット連盟副会長 秋山雄治

創部五十年おめでとうございます。

昭和二十四年に有志の方々が二十三年福岡国体の使用艇を福岡県より払い下げを受け、それを契機にヨット部が発足したと聞いております。貴校の場合、日常練習する場所が学校から遠くであり、何かと条件が悪かったにも関わらず、国体、インターハイ、優勝という輝かしい実績と五十年の歴史を築き上げられたのは、学校当局とヨット部OBの皆様の献身的努力の賜物と心から敬意を表する次第です。

私たちの高校時代は練習水域は福高は名島、修猷館は百道と分かれていて、日常の付き合いはあまりなかったのですが、大学でのヨット部時代は当時から強豪の同志社大で主将をつとめられた吉積久幸さん、私と同期で防衛大にヨット部を創設し、初代主将をつとめた大寺尉弘君、慶応義塾大でスナイプ級で活躍していた渡辺晏君等、全国的にも活躍していました。

大寺君は海上自衛隊時代から日本ヨット協会レース委員として、国体のレース運営をリードされ、国体のヨット競技運営における海上自衛隊との支援システムを作り上げた功労者であります。

また私が国体にフィン級で出場していた頃は、福高もスナイプ級が強く、姫野君、伊藤君達が大活躍でどちらが出て優勝するという時代で、我々成年組も大いに尻を叩かれた思い出があります。

ところで、最近学生のヨット界に大きな転換期がきて

いるようです。ヨット部の数そのものは増加したが、大学体育会系のヨット部は部員数の減少、高校でも私立でヨット部にジュニア出身者を集め、力を注いでいる学校は活躍するが他はやや停滞気味の傾向が現れております。

これは少子化の傾向、趣味の多様化、勝負至上主義へのアレルギー等いわれておりますが、我々が真剣に取り組まなければならない問題だと考えられます。

部活動の主体をレース中心の練習からクルージング等を加えた、セーリングの楽しさを堪能でき、オールラウンドなヨットマンに成長するような、トレーニングのプログラムを採用することも必要な時代となってきたように感じます。

また高校生にとって練習水域まで距離と所要時間も部活動の活性化の大きな要素ではないかと、思います。

福岡市では現在、香椎海岸沖を埋め立てアイランドシティ建設工事が進行中であり、そこに大濠公園の3倍位のディングリーにとって最良のセーリング水域が出現します。

福岡県連はこの水域の利用も市当局に要請していきます。これまで市西北部に限定されていたセーリングの水域が、東部地区にも出現し、市民のセーリング活動がますます活性化すると期待できますので地域的に福岡高校でもこの水域での活動を検討されては如何なものかと考えます。

福岡県ヨット連盟も結成五十年を経過しようとしております。半世紀も経過すると周囲環境も随分と変化しており、連盟もそれに対応し、また広範囲な活動を要求されるようになりました。この流れに即応し、多角的活動ができるよう役員一同努力していくつもりであります。五十周年が貴会ともに更なる発展のステップとなることを期待し、お祝いのことばと致します。

Ⅲ 海 想 語 録

一回生の初乗り

初代顧問 志 賀 史 光

ヨット部創立五十周年おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

よくここまで成長できたものと感慨深いものがあります。と云うのは発足当時はまことに覚束なく、まさにヨチヨチ歩きだったからです。それが全国制覇の金字塔を歴史の中に刻み福高ヨット部の名声を天下に高めながら、今五十年の節目を迎えることができました。これもひとえに歴代顧問の先生方並びにOB諸兄のたゆまざる御支援助と激励のたまものと感謝の念にたえません。

さて、ヨット部誕生当時からふりかえってみたいと思います。もう五十年も昔のことですからおおかたは霞がかかったようで細かいことは覚えていませんが、それでもいくつかは昨日のことのようにあざやかに思い出されま

す。

私は、昭和二十二年十月、大学を出てすぐ福中に就職し、二十三年に化学部を創り、初代部長をして石堂川や大濠公園の調査・研究を始めました。当時の化学部の生徒の中にヨット部五代部長となる岩石泰忠君がいました。

この化学部の部室（化学準備室）から昭和二十四年ヨット部が誕生しました。この部室には化学部以外の生徒もよくゾロゾロ遊びにやってきていたので、その連中を相手にヨットの面白さや珍事件などあれこれと話しを聴かせていました。そのうち、至極当然の成りゆきで、福高にもヨット部をつくらうではないかということになり、艇も何もないのになあれこれ考えても仕方ない。まず走り出し走りながら考えることにしました。腹づもりとしては、最初はすべて九大にお世話になるつもりで、ある程度の了解をとりつけましたが、そのうち国体使用のヨットが払い下げになることを聞き、早速申し込みました。ところが「ヨット部のある学校に」という条件だったので早急に部の創立を学校に認めてもらわなければならぬ。体育の伊之坂先生に申し込んだが「ヨットが無い。遭難の危険性がある。今のところ体育関係の部費には余裕が無い」などの理由で一向にラチがあかない。走り出した情性で中学以来の友人花谷君をひっぱり出し、「艇は話がついている（少しはったり）。海といえばすぐ遭難と考えるのは間違っている。金はいらぬ。」と二人して強談判。あげくのはては「認められんなら二人とも学校をやめますばい」とねじこみ、やっとのこと「同好会ならばよかろう」というところまでこぎつけた。

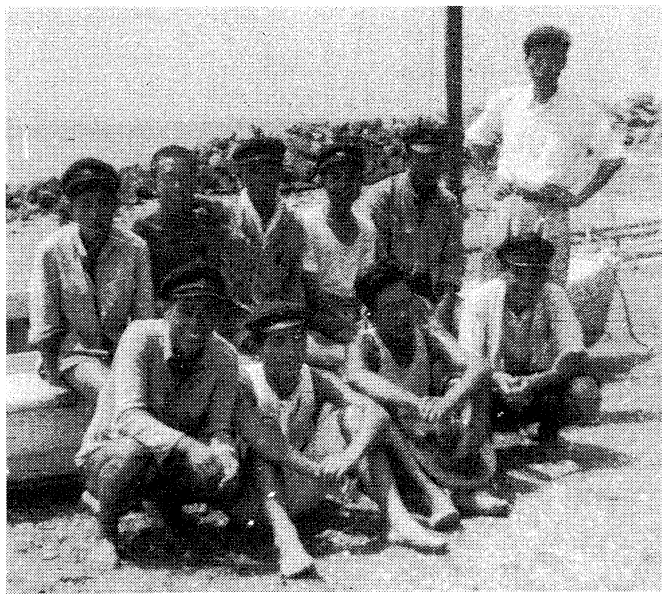
さあ一回生にとっては、今までさんざん聴かされてきたヨットの初乗りである。那珂川の河口須崎の艇庫に保

管してあったスナイプを九大の艇庫がある名島までの廻送セーリングである。誰と誰がついてきたか忘れたが、四名ほどではなかったか。その日は晩秋のあやしい空模様で、雨こそ降ってはいなかったが、日暮れ近くで海には白波が立っていた。初めてのヨットだから少しヒールするとあっちにゴロゴロ、こっちにヨロヨロ、バランスをとることも知らない。途中化学部のため石堂川の河口での採水を計画していたのでそこに近づくと三角波でセーリングがおおられ、艇が進まない。沈して艀装を解くときの苦勞が一瞬頭をよぎる。止むなく採水をあきらめ、やっとの思いで名島にたどりつき、艀装を解いてオッチョイ、オッチョイ。伊之坂先生の手まえ、沈しなくてよかったと正直のところホッとした。生徒たちは瞳をかがやかしワイワイガヤガヤ。これが一回生たちの初乗り体験である。

あれからもう五十年私も当然のことながら七十三の歳を数える。楽しかったことは思い出として残らぬが、苦勞したことは今では懐かしい思い出として人生を豊かにしてくれる。なかでも同じカマの飯を喰った仲間との苦勞は忘れられないものである。

平成二年一月十四日、OB会会長の平畑君の呼びかけで一、二回生七名が別府まで出かけて来てくれた。平畑、小山田、波多江、小河、小林、岡藤及び出利葉の諸氏である。二、三を除いてもう顔を見ただけでは誰だったか

分からなかったが、盃を傾けながら懐旧談に花を咲かせているうちに、いっきよに青年時代に逆戻りし、楽しいひとときを過すことができた。小河君は東京から、小林君は奈良からの参加でまことに有難いことでした。これらの諸氏、及びその時代時代を画した多くのOB諸氏、ならびに現役の諸君が、それぞれの立場でますます元気に活躍されることを祈って筆を擱きます。



発足当時のヨット部 後列右端が志賀先生

祝五十周年

二代顧問 安東 治

ヨット部創部五十周年記念御目出度う。心からお祝い申し上げます。

顧みれば第一回目の福岡での国体終了後、県よりヨット一艇（スナイブ級）の払い下げを受けて志賀史光先生を初代顧問として、スタートしました。艇庫は当時名島にありました九大艇庫の一隅を借り、名島で練習することとで始まりました。

当時福岡県高校ヨット界には西南、修猷の二高だけがあり、福高は第三番目の発足でした。修猷、西南はすぐ裏が海なのに福高は遠く名島での練習のハンディを負っていました。修猷、西南に追いつけ追いこせのOB諸君の必死の努力が始まりました。以来五十年今日迄の間に艇庫も手に入りましたし、幾度か全国大会に出場するという素晴らしい歴史をもつ部に発展しました。

どうか現役の諸君、OBの諸君の汗と涙の努力を忘れることなく、更なる発展を期して努力して下さい。

心から部の目ざましい活動を期待します。

OLD DAYS

一回 小林 龍太郎

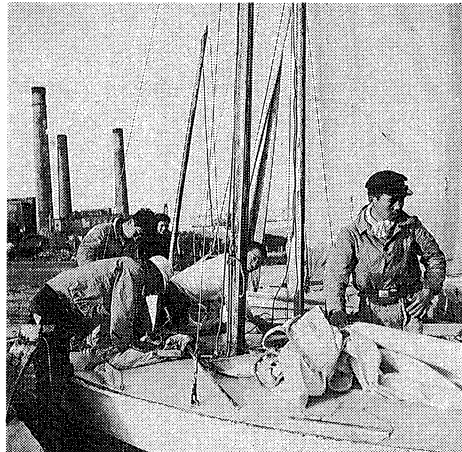


左から、小山田、波多江、小河、平畑、小林

ずいぶん昔の事です。いつの日だったかも忘れませんでした。ある日、教室に学内放送が流れてきました。「ヨット同好会に入会希望の生徒は昼休みに、化学の志賀先生の教室にお集まり下さい」教室の中には二、三十人は集まっていました。

私の高校生活は、男度胸で乗る、練習、合宿、試合の繰り返しで、たまに中洲で映画やうどんを食べ、女の子に片思いをし、一年に一回は東公園の図書館で勉強しました。今もお付き合いをしている小河、小山田、波多江、平畑とは、この時に仲良くなりました。

当時から運動音痴な私には、皆さんのような輝かしいヨット歴は持ちませんが、私は四人の親友を持てたのは、ヨット部に入っていたからだと思います。



昭和28年 名島 後方に火力発電所の煙突

質屋の初体験

一回 小河 亀彦

ヨット部発足時に会計を担当していました。

朝鮮戦争が勃発し、現在の自衛隊の前身である警察予備隊が設置された頃で、まだ、日本人が貧しかった時代の思い出話です。

ヨット部創立メンバーの数人から、学校に納める月謝

を緊急借用したことがあります。

こんな大それたことが学校当局にバレたら、多分、謹慎か停学処分と思います。

借用金は、D君紹介の船大工さんに支払うための修理用材料費と手間賃に当てる、非常に差し迫った経費でした。

ところが、予定していた学校支給の部費が予想額を下回り、借金の完済ができません。

そこで、思案の末に、D君と小生の腕時計を質に入れ、借りた月謝の不足分を補いました。今にして思えば、これが質屋の初体験。

小生の腕時計は、ついに、質流れとなりました。母の形見の女性用腕時計でした。

第5回高卒	ご氏名 鈴木 仁
ヨット部第3期 (計算式：高卒-2年)	

コメント欄

高校時代のほとんどを過ごした
須崎、名島、百地の海をよく思い
出す。博多湾をクルージングして
みたい。昔の艇友たちとレースを
してみたい。(老人の夢かなうかな?)

「福高ヨット部OB会」

四回 河原政明

私は仕事帰り途にヨット部が合宿している名島の帆柱亭に寄った。

その頃のOBは口伝で合宿日を知らされていた。そして土曜、日曜日ともなるとOB達が集まるのが恒例の行事だった。現役もそれに合わせて合宿のスケジュールを組んでいて呉れたようだった。

私が来た時は既に練習は終わっていて現役は艦装を片付けている所だった。私はOBの部屋に行った。平日にも拘わらず平畑先輩（一回）と出利葉先輩（二回）が来て呉れていた。

「よう／＼久振りやねえ」と先輩は言った。

「私、住まいが名島なもんですから……」私は緊張して方向違いの返事をしていた。

「自宅が名島なら現役の面倒も見て貰えるから良かことたい」と先輩は言った。

「わたしやあ時々顔を出す位のことしかしてまっせんから……」と私は答えた。

「そう言えば若手のOB連中は現役の練習に平日でも交替で来てるらしいばい」

「土、日にOBは何人くらい集まるじゃろうか」

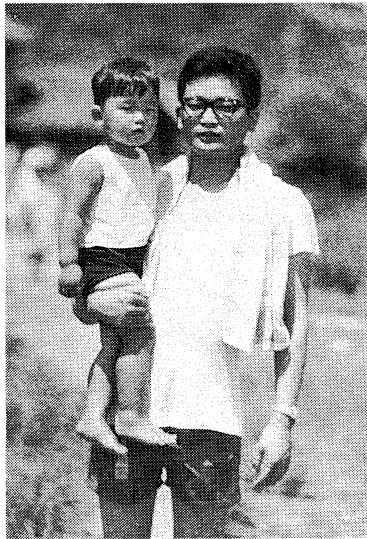
そんな会話をしている内に私は何気なく「我々もOB会を作りまっしょう」と言った。平畑、出利葉両先輩は私の突然の提案に一瞬戸惑ったようだった。

「うん／＼OB会／＼良いじゃないか」「作りまっしょう」と両先輩は言っていた。

そして福高ヨット部OB集めが始まった。現役が合宿中だったのが幸だった。

その秋、第一回の福高ヨット部OBの総会が中洲の喫茶店の二階で行われたのだった。

福高ヨット部OB会が発足する以前の話を書いて試た。



昭42.8月 志賀島合宿にて
4回河原OB

懐想 三題

四回 辰 巳 詢 二

私が福岡高校のヨット部員であったのは、昭和二十年代後半のことである。

当時、創部もないわがヨット部は、多々良川の河口にあった九大艇庫の軒下に寄生するような形で名島を拠点としていた。校友会活動としてマイナーであり、伝統もなく、適切な指導者もないまま九大ヨット部員の挙動を真似しながら、ただ、ガムシヤラな練習に明け暮れていた。ひたすら全国大会に出場して、部の存在をアピールすることだけを目標に。

当時のわが部員は、だれにも走り負けないだけの力量を有していたが、それだけではレースに勝てず、私の在部中には全国大会への念願は果たせなかった。

しかし、この三年の間、海と帆とに育まれた友情と「やるだけやった。」という満足が清冽な思い出として残った。これらのことが、現在の私を支えてくれている。当時のことを懐かしく回想して詩三編を草す。

波を眺めて

波を眺めてわがあれば

ほうとして風 吹ききたり、

波を眺めてわがあれば

忘れいし歌 よみがえる。

波を眺めてわがあれば

胸にのぞみは まきおこり、

波を眺めてわがあれば

おもいは赤く 燃えさかる。

波を眺めてわがあれば

おもいは赤く 燃えさかり、

波を眺めてわがあれば

胸にのぞみは まきおこる。

波を眺めてわがあれば

忘れいし歌 よみがえり、

波を眺めてわがあれば

ほうとして 風は吹きすぐ。

海への想い

あの海 あの色 あの風浪うねり

あの雲 あの風 あの飛沫しぶき

あの日 あの時 あの帆走はしり

ああ あの海の あの友よ

名島の浜にて

名島の浜にたたずみて
青くかがやく海を眺る
白帆をはりて誇らかに
出艇せし日もありにしを

あの日あるときこの海に
母校の名譽 背に負いて
舵柄を把りし戦慄は
疼くが如く よみがえる

艇首に碎ける潮しぶき
舷に体軀乗り出して
操る帆綱ひとすじに
きみは命を込めにしか

風を切り裂き 波を蹴り
ちぎれんばかりの風糸よ
鳴のマークの帆のもとに
励みし友よ今いかに

遠く過ぎにし日を想ひ
名島の浜を去りがたく
風吹き抜ける岸にして
胸裡熱き今日のわれ

当時ペアーを組んだ
河原政明君に呈す



昭和 27 年 志賀島合宿練習

スナイプへの鎮魂賦

四回 辰 巳 詢 二

(はじめに)

平成五年度、高校ヨット界からスナイプ級が消えるという。戦後四十数年、学生ヨットのシンボルであり続け、幾多のヨットマンを育ててきたスナイプ級は、わが国のヨット界に偉大な貢献をした名艇である。

かくいう私は、昭和二十六年に福高に入学し創部間もないヨット部の一員となった。その後大学を終えるまで、終始スナイプのシートとティラーに青春の日々を託してきた。今にして思えば、当時のヨットは現今のように、ただ走るためのだけのハイテク機器ではなく、乗手の魂と同化し、さらにそれを高揚させる何ものかを持っていたように思う。

そのスナイプが消えるという。深い感慨を禁じ得ないが、時代の流れに逆らうこともできまい。せめて、回想の断片を綴って、スナイプに対するひそやかな鎮魂の詞としたい。

(福高の初代スナイプ)

わが福高ヨット部の母体となった初代スナイプは、昭和二十三年度に福岡市とその周辺で開催された第三回国

体の使用艇として、建造された木造艇であった。

当時のわが国は、戦後の混乱期であり、衣食住のすべてが極度に不足していた時代である。ましてや、世間にはヨットに対する理解も関心もあるはずがなく、大会の運営に係わった人達の苦労は並大抵のものではなかったという。艇の建造についても、スナイプ級が、日本ヨット協会の制式艇として認定されて日も浅く、九州におけるスナイプ級の建造は初めてのことであったであろう。当時は、資材も建造技術のノウハウも乏しく、帆走理論も幼稚なもので、まったくの手さぐり状態での建造だったと推量される。出来上りも欠陥の多い艇であったとみえ、那珂川河口での試帆走で次々に沈したとか、一晚繋留しておくとも水舟になっていたとか、ラダーを海底にひっかけるとトランサムまで剥離したとか、九大ヨット部の機関誌『玄海』に当時の回想が散見される。

そのとき建造された十八艇(ヨット競技に十八都府県のエントリーしかなかった。)のうち十七艇が、払下げられ、わが福高も田中丸造船所で建造された一艇を入手した。これがセイルナンバー一二、艇ナンバー三八〇の初代スナイプである。同時に払下げをうけた修猷館の艇は、セイルナンバー一四だったと記憶する。

西南大OBの安松正美氏の記録によると、福高、修猷館、西南大が各一艇、九大が四艇、実業団は福岡県庁、東洋高圧、三菱化成、日本放送電、九州配電がそれぞれ

二艇ずつの払下げを受け、一艇は破損のため処分されたという。

余談になるが、その当時の艇ナンバーは、関東が一〇番台、関西が二〇〇、九州水域では三〇〇番台と定められていた。このことによっても、当時の艇数の少なさが推測できる。昭和三十年の時点でさえ、九州水域のスイープは、博多湾と鹿児島湾、長崎湾の艇を合計しても三十隻程度であった。三八〇の八〇番台は、九州水域で福高に与えられた艇ナンバーであった。その後間もなく、麻生典太氏（旧制福中の先輩で九大ヨット部のOBであったが、昨年（平成四年）赴報に接した。）から寄贈された二隻のA級ディングーは、それぞれ三八一と三八二の艇ナンバーを用いた。

福高では、これらの艇を擁して、昭和二十四年に、平畑会長を中心にヨット同好会を発足させ、間もなくヨット部としての組織を固めていったのである。

この初代スイープの外板には厚さ十九ミリのスギ板が使用されており、甲板はヒノキの縁甲板貼りであった。また、キールを保護するため、ステムからトランサムの下端まで、船底全長にわたって鉄板製のバンドが巻かれていた。センターボードとラダーは鉄板製で、ロープを引くと、ピンを中心として回転し、上げ下げが可能であった。これは、浅瀬における発着艇には便利であったが、かなりの重量物だった。当然のことで艇体が重く、出艇

や格納に際しては、八人ぐらいが力を合わせて持上げ、砂浜を移動させたものだ。

マストとブームは二枚のベイヒ材を貼り合わせて作られており、マストは中空式であった。セイルはコットンキャンバス、シート類は、みな綿製品、ハリヤード、ステイおよびメンシートトラペラーはスチールのワイヤロープで、つねにグリース塗りを欠かせなかった。ティラーにはエクステンションがなく、ティラーロープを付けて操作していた。そのためか、今でも、私はエクステンションの扱いに難渋する。

また、当時の艇の常として、水漏りは避けられず、チリトリ形の手製のアカ汲みやヒシヤクの類は手放せず、艇を乗換える際にも、クルーは必ずこれらの品を持ち歩いた。アカ汲みを忘れて出艇すると、そのクルーの頭上には、この世のものとは思えぬようなスキッパーの罵声而降ってくるのは必定だった。そのくせ、船底には、排水用のキングストーン栓が装備されていたが、ほとんど使用したことがない。陸揚げして一時間も経つと、船底のアカはきれいに排出されていた。

この艇は、微風時の走りは、いまひとつであったが、重心が低かったためか艇の安定性に富み、切り上がり性能も保針性も良く、非常に乗りやすい艇であった。事実、我々はクローズホールドの帆走では、他艇に走り負けることはなかった。

昭和二十八年の国体予選に私は同期の河原とペアを組み、スナイプ三八〇を駆って出場した。この艇は四レースのうち、三回のファーストフィニッシュを奪ったが、私の不手際から三つの失格に泣いた経緯は、すでに「かざいと」に書いたとおりである。その他に、今まで当事者以外には内密にしていたが、昭和二十九年と三十年の夏に、博多湾を出て津屋崎と芥屋へ一、二泊のクルージングを行ったのも、この艇であった。芥屋へ行ったときは、併走している僚艇の乗員の姿が見えないほどの浪に翻弄されて舌をまいたが、無事に帰着できたのは幸運というべきだったか。

初代のスナイプは、このように我々に多くの夢と教訓を与えてくれた艇であったが、昭和三十一年七月、名島の浜にて台風にあおられ、岩に激突して大破し、光輝ある生涯を閉じた。以来四十年、舷側を白、船底を赤に塗り分け、デッキとフェンダーおよびスパーク類をニスで仕上げたこの艇のシルエットは、当時の仲間たちの面影とともに、私の脳裏を去ることがない。

(スナイプ級あれこれ)

よい折りであるから、スナイプ級とはどのような艇であったか概観してみよう。

スナイプ (Snipe) 〓 鴨 (シギ) とは、世界的に分布する渡り鳥で、多くの種類があるが、好んで水辺に群生

して、水棲の小動物を採餌し、翼長は三十センチほどで細長く、首、くちばし、脚ともに長くスマートな姿態をもつという。

スナイプ級の誕生は意外に古く、一九三一年(昭和六年)のことで、米国のウィリアム・F・クロスビーによって設計された。特徴あるV字形の船底を持つナックルタイルの国際規格艇である。シャープなチャインと、ゆるやかに反り上がる艇首から艇尾に流れるシアラインは、トランサムのカウンター気味の傾斜角と調和して優美であり、半世紀も昔のデザインとは思えぬほどの躍動美を感じさせる。メンスルのアスペクト比は約一・九と決して高くはないが、他種艇に較べて高い位置にセットされるブームと、長いティラーが特徴的である。乾舷が低いことにより凌波性にやや劣るうらみはあるが、平水におけるクローズホールドの帆走性能はすばらしい。近代艇のようなスピニングもトラピーズも持たないが、人間のリズムに合致する素朴な帆走感覚が心地よい。

『日本ヨット史』によれば、スナイプ級のわが国へのデビューは、当時としては驚異的な早さで、クロスビーが設計を発表した直後の昭和六、七年ごろ、長野県の野尻湖で進水したという。それはオリジナルデザインのまま、神戸の造船所で建造されたとみられるが、「リップルズ」という艇名で、神戸在住の米人D・S・テリーという人物の持ち艇であったという。その後、数年を経ず、

昭和十年頃には、スナイプ級が野尻湖にて急速に普及し、現在でも数隻の艇名が確認されている。しかし、他の水域への普及は、後日を待たねばならなかった。

戦後間もなく、日本ヨット協会は、それまでの国内五メートル級に代え、スナイプ級を制式艇として認定した。以降、スナイプ級は主として学生ヨット界に浸透し、国体においても第三回大会から採用され、A級ディングーとともに、主要なレース艇の座を占めてきた。

スナイプ級は、世界的にも最もポピュラーな艇種の一つであり、わが国のほか、南北米大陸諸国に、愛好者の厚い層を築いてきた。とくにブラジルでは、人気があり、スナイプを描いた切手が三種類発行されている。

(むすび)

当初のスナイプ級は分厚い外板をもった木造艇であったが、昭和三十年代にはいると合板製の艇が出現し、それもやがてFRP製にとって替わられた。セイルやシートは綿製品から合成繊維へと飛躍し、スパー類も木製からアルミ合金へ、さらにカーボン素材への移行もうかがえる。また、シャックル、ブロックやクリート等、付属金物は暖かい光沢をもった真鍮から薄っぺらなステンレスに変わってしまった。ヨットを構成する材料が一変してしまったのだ。レース艇としての性能向上のための軽量化と、保守および整備の省力化のためである。



昭和 28 年

ヨットは、競技に勝つための道具だと考えれば、この変革は、すばらしい進歩、発展の姿だと理解できるが、一方で、ヨットと人間の結びつきに、もっと幅広く、奥深いものを期待する気持ち捨てきれない。純粹培養されたような現在の艇は、木造の時代のヨットが持っていた人間と同じ体温を、失ったように思えてならない。

最近、大学ヨット部の古手OBを中心にして、木造のA級ディングリーの復元話が各地でおこっている。この企画は我々のセンチメンタリズムの満足のためばかりではなく、A級ディングリーという文化財を後世に伝えるという大きな意味があり、諸兄にもぜひ賛同してもらいたい。またこの際、木造スナイプの復元も、ぜひにと願っているこの頃の私である。

平成五年三月 記

参考文献

- かざいと 福高ヨット部
- 黄金の舵(上) 安松正美 著
- 九州大学ヨット部五十年史
- 玄海 第二十六号 帆友会
- 日本ヨット史 白崎謙太郎 著
- 72 日本小型ヨット年鑑
- 日本ヨット協会

第7回高卒	朝本山 氏名
第5期 (計算式: 高卒-2年)	

50周年 ボンクラ一世代10世
良くんはたまた
若者よ 続けて、行こう

我々だけの 舟の初盆のため
出席 出来ません

第6回高卒	二 詢巳 氏名
第4期 (計算式: 高卒-2年)	

ヨットへの思い入れは年々深まります。
それは、現役時代の思い出をため
をけではなく、後輩諸君の絶えざる
活動が、私の気持ちを鼓舞して
くれているからです。

第7回高卒	氏名 吉積久幸
ヨリ部第5期 (計算式: 高卒-2年)	

昭和53年3月30日 赤い頂戴
 の日は消えた 同年11月3日
 末永隆一君練習中消えた
 当時就取莫徒 大学は出たけれど
 月給1万34600円時代
 二ヶ月分の給料を奉附してあげた
 明日は一夜残飯で暮すことか

第7回高卒	氏名 平山昌宏
ヨリ部第5期 (計算式: 高卒-2年)	

昨年退職しました。
 山歩きや外国旅行を楽しんで
 います。

第7回高卒	氏名 伊香噴魚
ヨリ部第5期 (計算式: 高卒-2年)	

創部50周年記念大会の模様
 中野光華の誘いにより、入部して5年
 の長きにわたり、小田光華君の指導と
 潮氣の湿度、服を着る板川君の教訓
 により、今一歩、V-2の扉を開く
 中、非常に貴重な経験と、今後の
 人生に自慢の思い出を残すこと

第7回高卒	氏名 久本寛
ヨリ部第5期 (計算式: 高卒-2年)	

このV-2の経験と、赤い頂戴の
 状態を、遠く親戚に知らせ
 してあげたい。65歳を超えて
 又海に出発したいと思いつく
 V-2の経験と、今後の人生に
 自慢の思い出を残すこと

海想語録

十三回 安河内 千 洋

高校を卒業して三十五年の歳月が流れてしまったのに、ヨット部の追想になるといろいろなことが「海想」されて、体に火照りを感じ、心の高ぶり行くは、如何ともし難きものがあります。

以下順に思い出されるままに「海想」を書きつづる所存ですが、実名にて登場される顧問の先生や諸兄弟、御同輩には、ご無礼の段をまずは先んじてお詫びを致す次第であります。

◎顧問の諸先生

入部当初のある土曜日、一人で名島でぼけーと海を見つめている小生に、「君は福高ヨット部かね。」と声をかけてくれた、丸内帽子のおじさんが三代目顧問の青柳先生でありました。数学の授業はぼんくらクラスの小生の補修を受け持たれたのでありましたが、時は悠久に流れる一時間であったのであります。山田先生は、四代目の顧問でありまして、小生の担任でもあり、公私にわたり教えを請い、今ある私の礎を築いてくださったのであります。

ところで、二代目の顧問は、誰あろう、御存じルート8の安藤先生であります。先生は、四年間もの間、小生

に数学の道へと、才無き者と申し召しになりながら、導いて下さったご恩は、山田先生御同様、生涯忘れることはできないお方であります。

さて、今までが、小生の在学中のことではありますが、卒業後は、本校ヨット部栄光の道を確認たるものにお築きになられた5代目岩石先生、通称「ガンさん」であります。

霧島が初の国体に行き、伊藤達が国体で優勝を成し得たのも、「ガンさん」のヨット部にかけてた厳しい程の情熱であり、行動力であったのであります。

もちろん、その陰には、平畑会長を始め、高田、河原、吉積、渡辺諸兄をはじめとした、OB諸兄弟の力強い後陣の支えがあったことは、皆の知るところであります。

◎合宿 名島海岸海の家

合宿には、いろんな先輩の参加がありまして、実に楽しい思い出が数多くあるのであります。

第六回の大寺先輩の訓辞には、皆正座をするがごとくに緊張をして聞き入ったのであります。大金先輩におかれましては、渡辺、早田、大島康先輩の手込めにあい、あはれにも、小生達の面前にその白きお尻をさらされたのであります。今は如何におわしますやら、お会いしたいものであります。

話は、数年前のことになります。医院開業の村瀬先輩のところへ一人の鍼灸師がかつぎ込まれたそうであり

ます。治療の甲斐有り意識を取り戻されたその方は、薄目の中から一言「オオ、村瀬じゃなかや。」松尾先輩のお元気な様子に、安堵した次第であります。

食べ盛りでありながら、未だ戦後を引きずっておりました当時の小生達や、いつもにこにこしながら、「ならば喰いたかや、桃や、葡萄や」と差し入れしてくれた高田先輩、キャバレーでビールのゴム風船踊りをご教示たもうた大島先輩を偲ぶにつけ、諸行無常、流転を感じる次第であります。

◎帆 走

小生達の帆走技術は、とても下手でありました。

本船上で仁王立ちになり、本船回航の術を大声で指示されていた渡辺先輩を、本船にまともにおぶっつけて海中に落とし込んだのは、同輩の小野でありました。

小戸での試合では、いつもどん尻でありまして、気持ちも萎える小生達を叱咤激励されたのが、白いスーツに黒のサングラスのいでたちの吉積先輩でありました。

そして、顧問の山田先生は、山の上からそんな小生達を、静かに見ておられたのであります。

その後の波多江や藤本や、清水、有吉、下村諸弟たちの活躍を思うとき、隔世の想いであります。

◎クルージング

小生と小野と2人の女の子でディンギーにのり、対岸の白浜までクルージングに行ったのであります。

楽しく泳いで無事に帰り着いたのでありますが、小生のクラスの女の子の友達は、中村女子高でありました。彼女は、まつげがとても長く、面長の美しい子でありました。

いつか又会える日をと願っておりましたら、練習を終え、みんな帰る途中の名島橋の上で、沈み行く夕日を独りで見てる彼女に会ったのであります。

小生は恥ずかしくなり、ちょっと笑顔を見せただけで、通り過ぎてしまったのであります。

それ以後、2度と会うことは無かったのでありますが、愁いの残る「海想」でありました。

◎五十周年

とりとめも無き「海想」を重ねる内に五十周年を迎える今日となったのであります。会長や小山田先輩を始めといたしまして、OB諸兄弟のご健勝とご活躍には、拍手喝采をお送りするのであります。

併せて、母校とヨット部と博多の町の発展を心より祈念いたしました。本日のお別れと致すのであります。

第15回高卒	ご氏名 城石 裕一
ヨット部第13期 (計算式：高卒-2年)	

名義に11名。名義の所長は「ヨット部」を
 兼任しておられる。ご連絡は
 TEL. 05-68-23-702 城石 裕一
 事務所 5月15日 津島 1-1-1 住所は
 富山県西条市西条町1-1-1 B-809
 である。今因に「部員」を募集する。

第15回高卒	ご氏名 安河内 千洋
ヨット部第13期 (計算式：高卒-2年)	

一ヶ月以内にしてください。
 8月の5期月会、初月の初集に一同ご
 生立して下さり、誠に誠に感謝して
 おります。都合のついでに
 法廷集のついでにさせていただきます。

スナイプと私

十六回 清水 道 雄

事務局の松原さんから直々に電話をもらい（平成五年
 三月のこと）、日頃の事務局の労に報いるためにもと、
 もう殆んど破壊された脳細胞の断片を集めつつペンを取っ
 ています。想い起せば三十年前に福高ヨット部へ入部、
 当時はスナイプとA級ディングーしかありませんでした
 が、身長？からかスナイプへ廻されました。そのスナイ
 プで最初の夏にクルーながら福高ヨット部初まって来

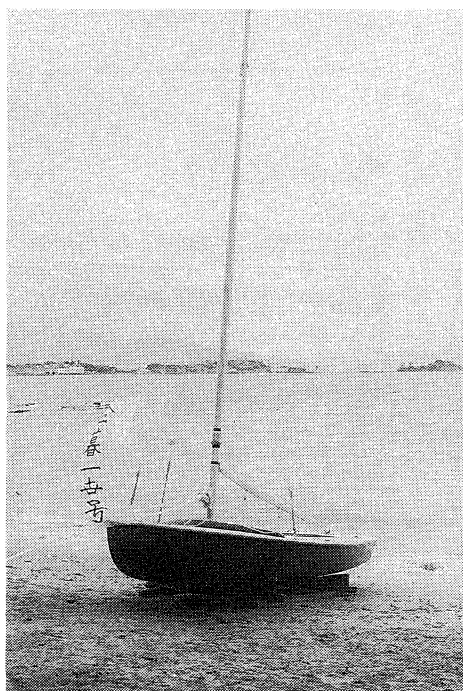
第17回高卒	ご氏名 坂口 幸雄
ヨット部第15期 (計算式：高卒-2年)	

皆様によろしくお伝えします。現在暫く
 単身赴任生活をして、大阪に家族がいます。お
 休みの日は福岡に行く機会が全く残念
 です。

国体出場を勝ち取り（裏で渡辺先輩の労・活躍・暗躍があった？）、高校・大学を通じて七年間も付合ってきたので、今回スナイプ級が廃止されると聞き、時代の移りを感じております。今、入部当時のスナイプの名前を思い出そうとしています。まず九大譲りのボロ艇、NEWと呼んでいたOLD艇と比較的新しい艇（名前が思い出せない）の三艇があったと思います。中でもNEWはある冬のバイトの時にペイントを真っ赤にしてしまい渡辺先輩から怒られたこともさることながら、シーズンを迎え無風の時にデッキに腹ばいになった折りに、イライラがつのる感じがしてまいりました。また、スナイプ屋で良かったなと思うのは、強風時にディングーは先にアゴを出して来るのですがその点スナイプは何とか風を抜きつつ走れる訳で、隣でディングー屋の有吉が「早く風待ちして欲しい」とうらめしそうな顔をしていたの思い出しました。この他にも色んな思い出がありますが私にとって「スナイプ」を想う時、それは艇を走らせた思い出よりも、艇を造った思い出になります。福高を卒業し、九大ヨット部を中途にして福高ヨット部の面倒を見させてもらった時期に吉積大先輩の発声で新艇をOBの手で造ることが決定され、名前は「ボンクラ一世号」と決りました。まさしくその名の通り、盆と暮に諸先輩にご無理をお願いし、ある時は厚かましくも自宅にまで押しかけさせてもらったことが懐しくもあり、また今は立

場が変わってやや複雑な思いです。それでも何とか目標を達成し進水式を迎えた時の感激は今でも鮮明に記憶しています。今も新艇の購入が進んでいると思えますがあらためて事務局のご苦勞に頭が下がります。頑張ってください。最期に日頃のご無沙汰を皆様にお許しいただきペンを置きます。

平成五年三月三十日 東京



昭42.5.18 ほんくらI 進水



香椎 片男佐の浜で祝賀会。3年石橋キャプテンと島本先輩

ゼロゼロセブン

十七回 坂本大司

「007」(ゼロゼロセブン)という愛称の、年季のはいったスナイプがあった。

名前の由来は失念してしまったが、たしか、色はうすいブルー。中央部が低くなったシアーラインで、独特の雰囲気をもつ艇だった。強風のランニングでは、よくバウを突っ込んで潜水艦をやる。アカはしっかり溜まる。重くてオッチョイはきつい、で、あまり優秀な船ではな

第18回高卒	ご氏名 藤本 大司
ヨット部第16期 (計算式：高卒-2年)	



かったように記憶している。

そのころ丁度、世の中（お金のある学校）では、FR P製の軽量・俊速の艇が普及し始めた時期で、他校の艇を「スッゲー、この船、トランサムが無い！」なんて驚きながら恐る恐る撫でていた。

もちろん「007」は、こんな俊速艇にはほとんど勝ち目がなく、ローテーションで「007」に当たるのを心待ちにしていた人は数少なかった。

こんな劣等艇ではあるが、私にとっては大変愛着のある船になった。私自身に日本人的判官びいきの性格があるためかも知れないが、福高ヨット部といえど真っ先にこの船を思い出す。

『「007」に乗って新艇に勝つ』、これが大きな目標だった。ある時、大先輩がこの船を操って新艇に一度も負けなかったことがある。そのカッコ良さに憧れて心に誓った。

：「007」で勝つ…。

そして、この目標が達成できた日のミーティングの待ち遠しさ。先輩に誉めてもらえる期待で頬は緩みっぱなし。しかし、この期待は当然のことながら裏切られる。先輩の口をついて出るのは、ミスの指摘ばかり。「坂本、なんで第二レグあっちのコース行った、バカタレ！」。本船に乗っている先輩というのは、たばこを吸いながら居眠りしてるものだとばかり思っていたが、どうも、そ

うではないらしい。知らぬふりして横目で見ている。げに先輩とは恐ろしきものぞ。

今でも耳に残る先輩スキッパーの声がある。上マーク回航「メイン返せ。ウイスキーはよ出せ。ローリング殺せ」。下マーク回航「ウイスキーしまえ。はよこっち来い。ジブ引け。殺せ／殺せ／（ヒールを）」。ただし先輩の場合、この「殺せ／」というのは、相手の船を殺せという使い方が大半であったが…。こんな声もすべて、「007」の姿にオーバーラップして想い出されてくる。

そして私自身は今、山陰の境港で、これまた年季のはいった中古艇・BW130プロトで遊んでいる。ただ、これは判官びいきのせいではなく、お金が無いためである。

第19回高卒	
ヨット部第17期 (計算式：高卒-2年)	氏名 末松 明

おめでとう 2011年
明は 11月2日 2011年
137 2011年11月2日...
OBの皆様へ御努力に頭が
下がります 2011年

第19回高卒	
ヨット部第17期 (計算式：高卒-2年)	ご氏名 坂本大司

なかなか参加できなくてすみません。
当方、変わりなくやっています。

第19回高卒	
ヨット部第17期 (計算式：高卒-2年)	ご氏名 坂健一郎

高校時代のA級ボートも、大学の遠洋航海の
海王丸も、緑道(ボート)海也、近江丸、
船乗り生活と共に、(ボート) 別世界の夢、50年
たのび成っています。もう一度、海、ボートに
戻りたい。セウボート希望の、いつか実現するの。
どうかな? 到着すると、おと寂しい、日々、

第22回高卒	
ヨット部第20期 (計算式：高卒-2年)	ご氏名 西田藤二

「今度こそ!!」。仲間の皆様
お頼みします、国会へ送る、2
下す。

第20回高卒	
ヨット部第18期 (計算式：高卒-2年)	ご氏名 木下哲郎

4月1日より、東京支社勤務に
なり、単身赴任中。
8/15に帰省できるかは、現在
不明につき、出欠は保留します。

真夏の夜の夢

二十一回 伊藤元晴

遊びの夢、女の夢……。けれど多くの夢はいつのまにか消えていきます。それでも忘れられない夢もあります。それは真夏にみた夢。

朝からのあまりのかがやきに

われた夏の太陽

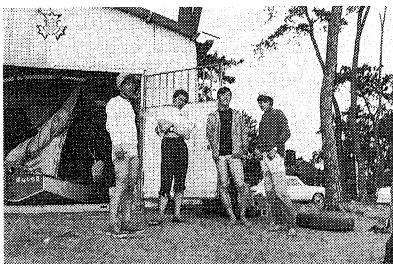
悪魔を運ぶ夏の西風

そして

人魚姫と泳いだ夏の夕なぎ

いつまでも忘れられない

真夏の夜の夢。



昭45.4 片男佐の艇庫にて21回生(当時3年生)
左から、齊田、伊藤キャプテン、湯川、藤木

最近感じること

二十二回 田代 剛

我がヨット部が誕生し五十周年を迎えるに当たり、徒然なるままに今思う事を書き綴りました。

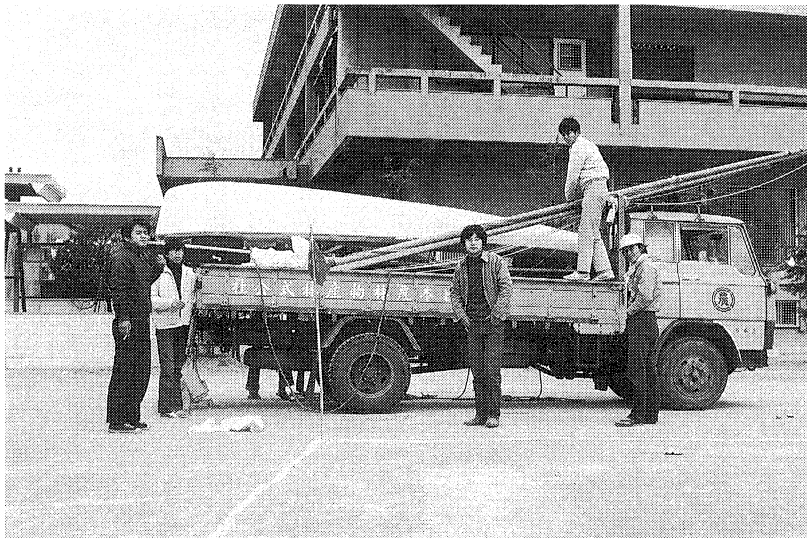
我らヨット部二十二回生の時代はインターハイ三位、国体優勝と華々しい活躍をした年でした。その前の年はインターハイ優勝、国体二位で、何と二年間で完全優勝したときで創部以来の快挙の年でもありました。我が人生において忘れられない経験と感激を味わうことができました。当時の練習は大変厳しく辛いものでしたから優勝したときの嬉しさは格別のものがありました。これだけ厳しい練習に耐えてきたから優勝したのだ、練習の積み重ねと自分の実力で勝ち取ったのだと、「自分を褒めてあげたい。」と、当時は思っていました。

そして卒業して年を数えるほどに勝てた理由が決してそれだけではなかったことを痛感するようになりました。我らの一つ先輩の二十一回生が猛練習をし技術を磨き、精神力を鍛えた結果全国優勝を成し遂げ、その先輩たちの指導と教訓があったからではないか、練習時に切磋琢磨してお互いにすこしづつ上手くなった同僚が居たからこそではないか、どんなに厳しい練習やトレーニングにも根を上げず頑張ってくれた後輩のクルーがいたからで

はないか、優秀な監督磯野さんと加賀多さんがいたから、OB会が無理して買っていただいた「ぼんくら一世」、『ぼんくら二世』で練習できたから、そもそもレベルの高い博多湾海域で優秀でライバルの西南高校や修猷館高校の同級生や、足手まといになることが分かっているも一緒に練習させてくれた福大、西南大学のおいさん達のお陰でもある。

しかし最も大事なことは、そもそも福高にヨット部があったからである。五十年前に生まれたこのヨット部を諸先輩たちが幾多の困難を乗り越え宮々と守ってきたからである。我々の努力や実力はほんの小さな一つの要素でしかなく、諸先輩の努力の積み重ねと監督、同僚、後輩、ライバルに恵まれ、ちょっととしたときの運があったからではと最近感じる次第です。

この伝統あるヨット部を未来永劫続くようOBとして応援し、一人でも多くの現役に優勝の感激を味わってもらいたいものと願っております。



昭48.12.16 オフの整備のため、百道より学校へ全艇を搬送
左から、真鍋、田代（2年）、竹園コーチ、島田（1年）、伊藤



昭 48 白フィンと当時の現役（2、1年）
 後列に2年の田代、宮下（キャプテン）、1年の島田
 前列に1年 山本、他

第25回高卒	ご氏名 豊原 政則
ヨット部第23期 (計算式：高卒-2年)	

40代の半ばとなり、逆風の中、
 クロスでいるのを障害にぶつかり
 ながら上マークを目指しています。
 早くランニングでゆったりしたい
 気もしますが、アビームで突っ走られ
 ばと思う今日此の頃です。

第25回高卒	ご氏名 真崎 邦彦
ヨット部第23期 (計算式：高卒-2年)	

現在、唐津の玄海セーリングシュブクラブ
 で、OPA指導をしています。ヨットの楽
 しみが、自分のレスから子供(小中学生)
 をレスで走らせる方へと変化してい
 ます。

27番目の夏

二十七回 小江 豊

暑い夏だった…。

その夏は西戸崎合宿でまず幕を開けた。貝殻だけの味噌汁、べちゃっとして中身不明おかず争奪のバトル、毎夜の怪しい宴会、食器棚の奥に見つけた幸運のエロ本、軒と歯ざしりと寝言の大合唱、意識朦朧の中でミーティング、ベタ凧の艇の如く遅々として進まない日々…。

二幕は、愛知県蒲郡でのインターハイ。博多駅での壮行会、眠れずに過ごした寝台列車、名古屋城でのかくれんぼ、日本海から甲子園球場を経由し三河湾に來襲した台風、大会本部のポールにはためく部旗、エルブのブロック、覗いた女風呂：湯煙りの向こうに微かに見えた白い影、温泉街の淫靡な雰囲気、双子娘のあどけない笑顔。フィニッシュの後の無力感。

三幕は、現役引退の褒美に連れてってもらった一泊二日の老岐クルージング。当時クルーザーは憧れだった。午前〇時小戸を出艇、前線通過の中玄界灘の大浪に翻弄され船酔いと空腹に悩まされた挙げ句、やっとの思いで同日午後四時郷ノ浦到着。その時に覚えた何とも言い様のない満足感と安堵感。今考えるとなぜ十六時間も要したのか不思議でならないが、保護者たる四人のヤング〇

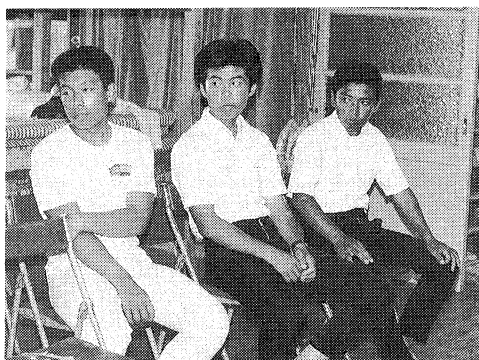
B（死語ですね）にしてみれば安全優先、必死の航海であったに違いない。帰りは前日とは打って変わっての好コンディション。揺れにも慣れ、ティラーも軽く、あつと言う間の九時間だった。

そして、小戸ハーバーに艇をもやった瞬間、その夏は完結した。

多感な時期だったからか、あまりにも印象が強烈だったからか、どの情景も鮮明に思い出すことができる。その時期一緒に過ごした連中にとっても思いは同じのはずだ。

そして今年、それぞれの世代の思いが詰まった暑い夏が五十回繋がった。凄い事だと思う。

祝五十周年。



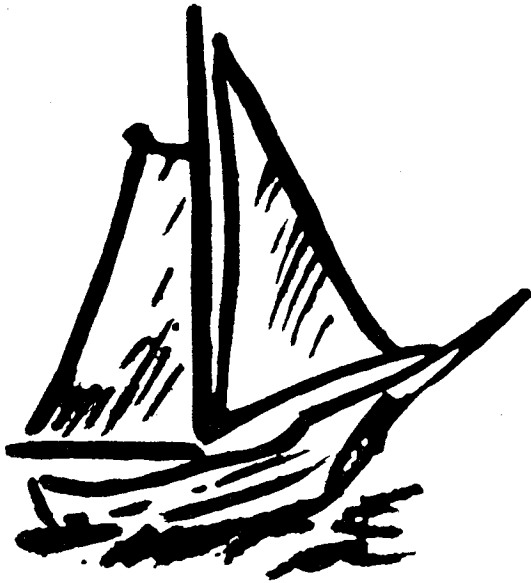
昭50.7.27 夏のOB総会（九大 大岳艇庫）にて
当時2年生の27回生 中尾、坂口、小江

第 30 回高卒	
ヨリ第 20 期 (計算式：高卒-2年)	ご氏名 白垣 郁哉

顔写真と多用可
現役部員紹介や、原稿の執筆等

第 31 回高卒	
ヨリ第 29 期 (計算式：高卒-2年)	ご氏名 尾崎 俊章

黄金期よ再び!!



第 32 回高卒	
ヨリ第 30 期 (計算式：高卒-2年)	ご氏名 江藤 陽一郎

「日々是好日、ニチニチコレコウジツ。」



昭 49 . 8 . 25 大岳にて夏の総会（ファミリーデー）



昭 49 . 11 . 3 大岳の艇庫開き。同年 6 月に百道火災にて艇を消失

事務局からのお願い

福高ヨット部OB会事務局

三十一回 井手 洋隆

福高ヨット部OBの皆様こんにちは、私は福高ヨット部三十一期（高三十三期）の井手です。皆様もご周知のとおりヨット部OB会の事務局長を務めています。

OB会の事務局を運営して四年目となりましたが、皆様に挨拶がなかなかできませんでしたことをお詫びいたします。まだまだ不慣れではありますが、これから先輩諸氏のご指導並びにご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

さて、創部五十周年を迎えるに当たって、この記念すべき事業に携わることをお願いしております。事務局の大任を仰せつかって、現在感じている事（私だけではないと思いますが）を触れますと、今年度で福高ヨット部OB会の会員総数約三〇〇人弱となっておりますが、一部のOBのパワーにはなはだ感心しておりますが、あくまでも、一部であります。と、申しますのも、事務局（福高ヨット部OB会自体かも!!）の悩みとしましては、幹事会に若いOBがいない事です。幹事会のメンバーの平均年齢としましては、個人の推測によりますと、四十三歳前後ではないでしょうか。このままで行くと、

福高ヨット部OB会は『頭でっかちの、古くさい福高ヨット部OB会』になってしまふ懸念があります。（現在の幹事会の方々ごめんなさい）どうか、若いOBの方々、是非々々、幹事会に参加して若返らしていただきたいと切に願っております。

今まで、疎遠にしていたから、『今さら参加できない』と、考えの方がいるかと思いますが、そこまで、福高ヨット部OB会は冷たくありません。いつでも、連絡いただければ、快くお迎えします。何かと特典（特に、人脈が広がります）もあると思います。この五十周年を契機に、さらに、来る二十一世紀に向けて、福高ヨット部OB会が飛躍するためにも、若い方々の協力が必要です。いつでも、連絡下さい。

以上、グチっぽくなりましたが、福高ヨット部OB会『事務局からのお願い』です。

三十三回キャプテン

永田雅之氏の思い出

三十三回 新 正樹

「心配かけてすまん。すまん。」口唇が真っ青になり、寒さで体を震わせていましたが、着岸するなり元気よく、永田はそう言いました。

あれは三年生が引退して間も無い九月の末の頃。ヨット部員をもっと増して、新体制に弾みをつけようと計画した試乗会の出来事でした。

出艇したのは、当時コーチをして頂いた川浪さんと最上級生になった二年生がスキッパーの四ハイ。初心者若葉マークつきの一年生である永田と私がヘルムをとる二ハイ。合計六ハイであったように記憶しています。夏の合宿で初めて握らせてもらったティラーの感触がたまらなくうれしくて、その日も意気揚々と出艇した我々一年生スキッパーでしたが、名島の海はすこぶる機嫌が悪く、風はヘルムをとってから経験したことの無い強さに達しようとしていました。

私の船に運良く（運悪く？）あてがわれた試乗会に参加した見知らぬ同級生は、手荒い海の歓迎に見る見るうちに、緊張で顔が硬直し始めていました。

「今日はちょっと風が強いごたあ。自然が相手のスポーツやけん、こんな日もあるたい。」ヨット部員とヘルムスマンという誇りにかけて、強がってみたものの、私自身も不安が一杯でティラーを握る手は強まるばかり……。そうしたところへ、

「風が強ようになってきたけん、一年は先に着岸せれ。」重くのしかかる風と波間から、かすかに川浪さんの声が聞こえました。「とにかく沈をしませんように」と念じながら、悪戦苦闘の末なんとか岸に近づくことができま

した。

「ところで永田の船は大丈夫かいな。」ようやく落ちて着いて回りを見渡しても白波ばかり。じっくり遠くを見つめてみると……。『いた』遙か沖合いに点となった半沈のFJを見つけることができたのです。

とりあえず自分が乗っていた船を船台に上げて待つことと三十分。一時間。誰も戻ってきません。二時間が過ぎようとしたところで、ようやく先輩たちの乗ったFJとスナイプが、試乗会に参加した全ての一年生を乗せて着岸。先輩曰く『沈上げしてもコックピットが風呂桶状態なので、沈と沈上げの繰り返し。スナイプ二ハイを救援艇として残し、戻ってきた』との由。この時既に辺りは薄暗くなり始め、妙に秋風が寒く感じられました。

その後三十分程たったでしょうか、瞬く間に名島一帯が黒闇に包まれようとしたその時、スナイプに引張られるFJが姿を現わしました。強風を心配して名島に來られていたOBの方の指示により、海上保安庁への救助連絡等もしましたが、なんとか自力で戻ることができたのです。三時間は優に海に浸りっぱなし。無言のままうなだれるクルーを務めた同級生を気遣いながら、

「心配かけてすまん。すまん。なかなか舟が起き上がらんで大変やったぜ。」肉体的にも精神的にもきわどい状態から開放されたあの時に、ひょうひょうと言った永田の言葉が今でも耳に残っています。『こいつのヨット

への思いは熱い。気合が入るとる。同期ながらあっぱれと感じていた自分を思い出します。

「ヨットに乗る時と同じくらい乗ってない時もヨットのことを考えること」いつか『かざいと』にもそんなことを書いていた彼の口癖を裏付けるように、共に練習に励んだ福高ヨット部時代はもちろんのこと、インカレでの活躍、社会人になっての外洋レースと、永田はいつもヨットを愛し続けていたと思います。

一方私は、高校卒業後十年程福岡を離れるのですが、その間ヨットに乗る機会も次第に減り、福高ヨット部との関わりは薄れ、思い出した頃に届く『かざいと』が唯一の情報源となっていました。長い間潮の香りを忘れかけていましたが、四年前に仕事の都合で博多に戻ることとなり、久しぶりのヨット部OB総会に顔を出したのをきっかけに、OBの方のヨットに乗せてもらう機会を得ました。

心地良い潮風。照りつける太陽。ゆったりと流れる海原。まぶしいデッキ。波切る音……。ふつふつとヨットがもつ不思議な魅力が甦ってきました。最近では、遅ればせながら昔の恩返しができるかと、積極的にOB会に参加しています。これは現役の皆さんの役に立てればという思いと自分自身のヨットライフを楽しみたいという思いからです。今般のヨット部創部五十周年の実行委員のメンバーに入れて頂きましたが、毎回の打ち合わせも終りが

けになると、ヨット談議に花が咲き、世代は大きく違いますがが集まった皆は少年の頃の様に目が輝いています。多感な高校時代にヨットへ打ち込んだ情熱。又そこで生まれたすばらしい友情、出会い。その時々々の環境は異なっている、ヨットへの熱い思いは皆共通しているのです。OB会はざっくりばらんで、現役時代とは又違った楽しさがあります。現在は上の代の先輩が中心となっていてはいますが、若い代の方も是非ともOB会をのぞいてみてはいませんかでしょうか。新たな発見がきっとありますよ。

「久しぶりのヨットはどうや？。海はやっぱり良からうが」遠くで永田の声が聞こえてきそうです。

若くして逝った永田雅之君の、冥福を祈ります。

第 27 回高卒	
ヨット部第 28 期 (計算式：高卒-2年)	ご氏名 伊藤 親和 <small>しんわ</small>

.....
持身先達 御至敬持てす。
.....
このたび就職により住所が変更されました。
.....
(株)神戸製鋼所
.....
〒675-0111
.....
加古川市平岡町二俣
.....
二俣南神鋼深 115 区
.....

第46回高卒	さかくら やよい
ヨリ第44期 (計算式: 高卒-2年)	氏名 坂倉 弥生

昨年、教育実習の時に、現役の皆さんのあがりど
4年ぶりには「J」を「G」に変えてました。
久々の博多湾は相変わらず「打」はいい海でした。しかし
気持ちのよい日でした。お天気に「機会があれど」
海に出たいという気持ちがつのりました。
*50周年事業の企画案行。おついでです。
阪急の心は「勝」っていいよ。

第46回高卒	
ヨリ第44期 (計算式: 高卒-2年)	ご氏名 山田 靖子

福高ヨリ部の「木」が「シ」になったと、便利
「ふん」が「ふん」になって思いました。全国大会の日程ど
おかし、全国にOBはあつてはいるので、応援は
いすすす、レスポンス結果など「のせてくれれば」、
カンパ「して」しよが「な」て気分になすすとい
思ふ「すか」...。て「き」を「き」う「る」から...?
(福岡「口」は「た」けと「金」は「た」ん OB「な」ては「は」って「は」る「て」は「る」)

現役時代復刻版 (平成5年4月)

計画書

四十三回 取違 剛

サッカー、ラグビー、相撲、バスケットや他にもノル
ディッククラージュヒル、ノーマルヒル、はたまた複合に至
るまで、観るスポーツが隆盛を極めている。サッカーやっ
てます、と言えば、キャッチ、ラグビーやってます、と
言えばオーツと歓声やどよめきのひとつふたつ挙げられ
る。昨今、このブームを逃がすまい我も我もと様々な幾ら
かいかかわしいスポーツも次から次へと市民権を得ていっ
た。スノーボードなんかは本当にうまく波に乗ったもの
だと感心する。ヨーロッパでは日本でスキーができるな
どということは信じられないという。あんな低緯度の国
でスキーなんてノと考えられているらしい。それほど気
候条件も適していない日本で何故スキーはあそこまでス
ターダムにのし上がったのだらう。それはさておくとし
て、この大きなブームにヨットは乗り遅れてしまったの
ではないか。間違いない。周りのマイナースポーツがど
んどんファン層を広げていく中でヨットは何も手段を講
じなかった。まったくもって勿体ない。この四方を海で
囲まれた国でヨットがスキーに負けはしないだらう。い

つの日にかきつと、ヨットはお年寄りから幼児までが楽しめる巨大なスポーツに育っていく。

まず手始めに「少年ジャンプ」に大型ヨット漫画「プロウ&ラル」を連載する。今日花形と呼ばれるスポーツの全てが漫画によってその地位を不動のものにしているからこの過程は欠かせない。舞台は博多湾で、主人公は荒くれ者だったがヨットに魅せられてのめり込んでいく武闘派の武郎、そしてIQ三百という頭脳派日系三世ラルのコンビ。この二人が幾多の苦難を乗り越えて、行く行くはインターハイを征するというストーリーは間違いなく全国の少年たちの心を打つだろう。こうしてブームに火がつくのである。次にスターを発掘する。ドカベン香川がかつてそうだったように、全国のヨット少年からブロー君、ラル君を探し出すのである。この二人が「月刊ヨッティング」の表紙を飾って部数増。次第に「ターザン」やら「アンアン」やら「キャンキャン」やら「明星」やらの表紙にも進出して行ってギャルの心を掴むのも間違いない。こうしてヨットはメジャーへの道を歩んで行くのである。プロヨットリーグの実現もそう遠くはないだろう。「日本勢」も四位独占、呆気にとられる欧州勢」などという見出しでヨットのワールドカップがスポーツ紙の一面に報じられ、「ジャパンは強すぎるよ」というT・リンスキーのコメントが載るのである。全国各地で「落水ノ沈ノ氣にするなあ」をキャッチフレー

ズに小学生ヨット教室を開催したところ押すな押すの大盛況。ブームはとどまるところを知らずママさんヨット、草ヨットなども流行って、果ては全国で小中高の十二年間、ヨットは必須科目となってしまふ。

どうです、この遠大なプランは、

あとがき

私たち第四十三回生が無事にヨット部の活動を全うできたのは、先生方やOBの方々のお力添えの賜物です。ありがとうございます。又、この度新艇J-1030を購入できたという後輩からの知らせを受け、感無量です。現役生の要望を聞き入れて下さった小山田先輩を始め、OBの皆さん本当にありがとうございます。

最後に後輩達は、まだ他校と比べると条件は整っていないが少なくともJ-1030を擁する学校として恥ずかしくない戦いをして欲しい。壱岐の辺りでサメの糞が発見されたという話も聞くしくれぐれも艇を大事にしろよ。それじゃあね。

健闘を祈る

四十三回 古屋 剛 太

昨年言いたい放題言わせてもらったにも関わらず九州

大会ごときで負けた事をおわびします。(本当に頭は丸めました。)

スナイプ級最後の年にインターハイに出場しようと思いましたが、いかにせんうちは立地条件が悪く、毎日乗れなかった事が残念でなりません。それでも県大会で優勝する事ができたのは、久保先生をはじめ、OB OGの方々そして後輩たちのお陰と大変感謝しています。特に久保先生におかれましては好き勝手にさせてもらい、又、かなりの額の出費をさせてしまい大変申し訳ありませんでした。そして後輩たち、九十二年のバルセロナに出た四七〇の二人はいゆるサンデーセイラーであったそう。練習しただいでおまえたちでも五輪に出られる実力はつけられるはずだ。がんばれ。分かん事があたら福大の人に聞け。瀬戸口さんとか無茶苦茶「いい人」やけんいろいろ教えてくれるよ。健闘を祈る。

三年間の思ひ出

四十三回 佐土嶋 孝文

土・日はハーバーという生活にピリオドを打ち何か月もの月日が過ぎた。「あの頃が懐かしい、あの頃に帰りたい。」これが今の気持ちだ。

例えば、焦げてしまいそうに暑かった真夏の太陽・合宿(サメと動くマークには生きた心地がなかった)・身も心も凍りそうな冬の海・改めて恐さを知った台風(五五六と〇君はかわいそうだった)・たなぼただった宮崎(浜木綿の鯉はうまかった)・県大会(悔しかった)・青春の全てが終わったような気がした)・沖縄の海(古屋・高橋ありがとう。とにかく最高にたのしかった)・期末テストは目もあてれなかったけど)………思い出は尽きない。

これらの思い出は、私の青春のアルバムの二ページ、二十九ページを埋め、永遠に消えることはないだろう。最後に、愛艇を貸してくださった中村さんをはじめ多くOBの方々、先生方、本当にありがとうございました。そして、二年半の間、ともに励ましあい、時には喧嘩した六人の仲間に感謝している。一・二年生、おまえらが写真入りでヨットイングに載る日を楽しみにしている。

三年間を終えて

四十三回 中村 賢一

振り返ってみると、あっという間に三年のヨット生活が終わっていた。一年生の時に、殴られたり、蹴られた

りしてきたが、先輩達は皆いい人達だったし、又、後輩達もよく自分達を支えてきてくれたと思う。特に、パートナーであった古賀には、一年間自分についてきてくれて、大変感謝している。そして、共に歩んできた個性溢れる仲間達。

ろくに勉強もせず、ハーバーから帰ってきたら寝るだけのような毎日を過ごしてきたが、そんなにもヨットを愛せたのは、こんな皆のおかげだ。

結果としては、良かったのは一般レースのみで、県大会では三位で終わってしまったけど、自分の高校生活をとても充実したものにしてくれた福高ヨット部に入って本当に良かったと思っている。

最後に後輩達へ。辛く、きつい事が有るかもしれないが、自分の持っている力を出しきれないように最後まで頑張ってください。

「回想記」

四十三回 織田 順之助

思うと風と海のおいとそして、さまざまな事が頭に浮かぶ。初めてスキッパーをまともにした日、調子に乗り定時までには帰着できず苦しんだ事、取違と沈の回数を競った事、強風の時に何度も沈をして死を覚悟した事、

宮崎や沖縄に行った事、たった一年間の間にどれだけ多くのでき事を体験したであろうか。しょうもない事からなさけない事、うれしい事、かなしい事、驚いた事、挙げればきりが無い。そんな思い出をつくってくれた一、二年生、そして中村・古屋・取違・佐土嶋・池田・福沢の六人の同級生に月並ではあるが感謝しています。最後にみんなへ

Life is like an onion : you peel off layer after layer and then you find there is nothing in it. James Huneker

いろんな事に挑戦して、後悔の少しでも少ない人生を!!

いい思い出

四十三回 福沢 綾乃

不思議ですね。私がヨットを続けてきた三年間のことを振り返ってみると、どれも「いい思い出」ばかりです。思わず叫びたくなるような（よく叫んでいたような）トランプのあの快感、三枚張りのあのスリル、また穏やかな海で船が波をかきわけけるあの音、レース前のあの光景。志賀島や玄海島へのセーリング、みんなで行けた宮崎遠征、福高店でのひととき……どれも部活の一部なのです、とても楽しかった。

また、思わぬ大きな穴をあけたP君の船との衝突事件、船沈没未遂事件など、様々なショッキングな事もありました。が、今では笑って話せますし、恐怖の実感もとうの昔に消え去りました。ただただ、桐の箱にでも入れて、いつまでも大切にしたい貴重な経験だったと思われるのです。その度に、周囲の人や先生方に多大な心配と迷惑をかけてしまったと知っていながら……。悔しくて涙を流したことも、ドキッと冷や汗をかいたことも、『過ぎ去ればすべて良き思ひ出』の一言に尽きるようです。

このように思えるのも、そして何度も危険な目に遭ってケガ一つなく過ごせたのも、ひとえに、皆さま（みんな）のおかげだと思っています。本当にありがとうございます。ありがとうございました。

仲間たちへ

四十三回 池田陽子

引退してからももうすぐ一年が経ち、すっかり色も白くなって、ヨットとは縁遠くなってしまっているのが嘘のようだ。速く走れるようになる為に、日々練習を重ねていた頃がとて懐しく、今でも「去年の今ごろは……。」と、ヨットの事を思い出すことがある。

振り返ってみて、改めていろんな事があったことに気づく。真冬の海や強風下でのセーリング、春の宮崎遠征、暗くなるまでハーバーに残り船を修理した事……。今となっては、全てが良い思い出となっている。ただ、良い結果を残すことが出来なかったことに悔いが残るが、それまでの過程では計り知れない大切なものを得ることができたと思う。その中でも特に仲間達には、心からありがとうを言いたい。彼らなしには頑張ることは出来なかっただろう。

最後に、OBの方々、先生方、本当にありがとうございます。現役のみんなは、後で良かったと思えるような部活にしていって下さい。

頑張るぞ

四十四回（三年） 大場 慎一

ヨット部に入って、二年が経った。僕たちの代は男だけ十人もいる。人数が多いのは楽しいがどうしても艇の問題が解決できなかった。十人の男子部員にFJが三艇という状態が続いた。そのころはペアもままならなく、船にも乗れたり乗れなかったりした。しかも、福高の練習時間は他の学校より極端に短かい、このままじゃ絶対に他の学校に勝てるわけがない。



平5.4.25 小戸にてFJ(1030)進水式

そんな僕たちを本気にさせたのは新艇だった。みんな新艇を見ると目の色が変わった。以前よりも船に乗ることができるようになり、新艇のクルー・スキッパーを指すようになった。自分もそうだった。練習も内容が濃くなり、みんなの腕も上がってきた。でもまだまだ他の学校には及ばない。

もっともっと練習して西南・修猷に勝つ。

ヨットと私

四十四回(三年) 山田靖子

私も高校に入ってヨットに出会えてよかったと思ってるうちの一人です。ヨットも海も部活の仲間もみんな大好きです。だけど今までの間にはいい思い出だけじゃなくて、くやしかったこと、つらいこと、泣きたくなることもいっぱいあって、それでもやっぱりどんなにきつなくても日に焼けても毎週ハーバーに来てヨットにしがみついている私は、どうしてもヨットが好きなんだろうなと思います。

三年目に向けて

四十四回(三年) 高橋洋一郎

ヨットを始めて二年間、いろいろと大変でした。土曜、日曜がつぶれて勉強も遊びもできず、ただひたすらヨットばかりをやってきました。微風では何時間もじっとしているばかりで、強風では沈んで孤独を味わい楽しい事ばかりではありませんでした。しかしプレーニングした時、サイドジャイブがきまった時、そしてトップホーンを聞いた時の感動は忘れられません。今年には新艇を買っ

ていただいたので、インターハイで上をねらいます。

「大喜利」

四十四回（三年） 野添和人

先輩たちが引退し、ヨットにまともに乗りだし今になってやっとヨットの魅力を感じている。又、怒鳴っていた先輩の気持ちもわかる気がしてあの時を多少後悔しないでもない。

今、自分は最近（九十三年四月現在）何か良い事があつたらしく鼻の穴をふくらませ、調子に乗りまくっている中村昌樹（通称・タマちゃん）ことケベと共にながらんでいる。最後の試合は今までのすべてをだしきりたい。ケベ／＼がんばろう。そして、がんばってくれ。春近し。あしからず。

最後に（今一瞬の光を）

四十四回（三年） 岡崎雅彦

二年間ちょっとしたヨット生活も終わりに近づいているわけだが、ここまで自分はさぼりにさぼってきたので二年の終わり頃にはみんなとの差もひらいていたのには、

ヨットに乗ってきた内で一番の後悔したことなので、二年・一年生はさぼらずがんばってほしいと思う。もう少しで引退なので、最後の県大会は出来る限りの努力と気合いで散っていいこうと思います。一生で乗れるか乗れないかの貴重な体験ができて良かったです。

「ダイヤモンドは傷つかない」

四十四回（三年） 浜口歩

軽い気持ちで入ったヨット部での生活も、最期の晩餐を残して、あとは引退というところまで来てしまった。今までは、自分（自分と聞いて自然とよむ）の優しさや恐さなど、多くの体験をして、たくさんの人がヨットからはなれられないのがわかった気がする。これから先、この貴重な体験を生かして頑張る、そして負けない。最期に、新艇を買うにあたって努力してくださったO B方々、どうもありがとうございました。

終盤戦を迎えて

四十四回（三年） 渡邊桂三

ヨット部に入ってもう二年が過ぎた。大会まであと一

ヶ月しかない。現時点での予定は、まず県大会を軽く突破し九州大会では新艇と共に One two Finish をかましインターハイへ出場しその勢いで大学現役合格、という具合だ。人生そんなに甘くないかもしれないが「努力は天才に勝る」というように、悔の残らないよう精一杯頑張ろうと思う。

「ペンネーム

ヨット大好きっ娘さんより」

四十四回（三年） 古賀 紀彦

昨年の五月、中村先輩と共に敗れた時のくやしさをバネにこの一年間頑張ってきた。いろんな事があった。キャンプをするのをいやにも思った。気合がから回りにして、みんなに迷惑もかけた。だらしない時も度々あった。しかし、あの唐津で誓った夢を実現するべく、最期の大회를最高のものになりたい。目指すはインターハイ出場だ。

「もう一度」

四十四回（三年） 杉野 奈津代

代替わりをして早一年になろうとしている。去年まで

先輩達に頼りきっていた自分達でも、少しは成長したのだろうかと少々不安になりもする。最近、一年の時の自分の書いた風糸の原稿を見て、苦笑してしまった自分がなんとなく悲しかった。自分達は今、試合前一ヶ月になろうとしているのに（最も、これが出回ってる頃にはもう何もかもが終わっているだろうが）なんて弱気なことなんだろうと。——あと一ヶ月、いや二ヶ月、自分の持てる最高の力でインターハイを目指したいと、もう一度ここで述べさせてもらいます。

ヨット部での二年間

四十四回（三年） 中村 昌樹

約二年間籍をおいたヨット部ももうすぐ引退だ。今思えば、長かったようで短かった二年間だ。今まで生きてきた中で最もハードだったけど最も充実していた二年間だった。他の学校ではできない貴重な体験をしたと思う。そして、残された期間は短いけどタマちゃんと永遠の愛を育ぐんでいきたいと思う。僕は決して君を離さないぞ愛しのハニー。これも夏の思い出。

S 級

四十四回（三年） 石松 智裕

ヨット部に入って早くも二年になろうとしている。先輩に怒鳴られ、同僚に教えられたりしながら今やっとヨットが面白くなってきた。スナイプ級が高校ヨット界において一つ、また一つと消えている今日、福高最期のスナイプ、「ぼんくらⅦ。」こんなヨットに乗れて私は幸せ者だ。七世の名に恥じぬよう、あと少しの間だが、がんばりたいと思う。

ぼんくら

四十五回（二年） 吉田 茂

毎週、貴重な日曜日をこの一年間ずっとヨットにつきこんできた。俺たち一年には「ぼんくら」であるスナイプしか残っていない。メインセールを上げ博多湾に出てゆく。微風はいいが風が吹けば身をのり出してフルハイク。腹がよじれ、足がもげそうになる。バウから水しぶきがとぶ。シートをひけばマストがきしむ。クルーはきつかったが、日が落ちるまで走ったのは楽しかった。この夏からは、FJ。こん度はスピンを上げて、走り続けよう！

ヨット部に入ってよかった！

四十五回（二年） 井手 考司

ヨット部に入って一年になるが、今考えるとヨット部に入ってよかったと思う。普通の学校生活か部活動ではけっして味わえないことを数多く経験することができたからだ。これからは僕たち二年生が部活の中核として活動していくことになるので、しっかりがんばろうと思う。

二年目に向けて

四十五回（二年） 南里 健介

自分がヨット部に入ってから一年過ぎた。一年前の自分に比べ、少しはたくましくなり、ヨットについての知識も多少は増えた。

今年からFJ級のみとなった。が、OBの方々の援助で「一〇三〇」という新艇を手に入れて、先輩方もよりいっそう活気づいてきたと思う。自分らもこの勢いをうけついで、より上の大会をねらえるようにがんばりたいと思う。

ヨット部に入って

四十五回（二年） 齋田 倫 範

自分は、ヨット部に入って、初の頃は、自分が何部であるのか疑問に思うような日々が続きました。先輩がたが、非常に多くて、毎日が出艇手伝、弁当係の毎日でした。でも、厳しいキャプテンや顧問の先生のおかげで、海の厳しさを学び、高校でヨットをやって良かったと思っています。また、OBのかたがたのおかげで船が増え、後輩に、自分達のような思いをさせなくてよくなりました。どうもありがとうございました。

自分とヨット

四十五回（二年） 光 安 健太郎

僕は始め、ヨットとは何か全く分からなかった。だが次第に、ヨットの構造を知り、走る原理を知り、クロールスを走り、タックをして、ヨットのおもしろさが分かってきた気がしている。まだ分からないところもまた多いが、進んで学んでいきたい。

今から

四十五回（二年） 木 村 亨 平

もう間もなく、代がわりが行なわれますが、僕は少し不安があります。僕ら二年生だけで、一年生を引っぱり無事にやっていけるかどうか。のこりあと数カ月で、三年生の技術を盗むとともに、練習の安全面についても、しっかり教わり、勉強しようと思います。



平4 夏 小戸ハーバーにて 当時現役の43・44・45回生

◆ 福高ヨット部 50年の歩み

年度	記 事	顧 問	主 将	部 員 数	艇	艇 庫
24	◎秋「福高ヨット同好会」発足 ・九大ヨット部にお世話になる。 (当時九大キャプテン児島氏) ・名島「奥の家」にて合宿 ・初沈(新木・岡藤組)～箱崎沖	志賀先生	1回(2年) 関 屋	2年 8人 1年 3 計 11	S級1 (国体払下)(A級一借用)	九大艇庫に問 借 伊 崎 洲 崎 箱 崎
25	・文化祭で教室にA級ディングー 展示。 ◎麻生典太氏より、A級2杯いた だく。 (部費 2～3万円)		1回(3年) 関 屋	3年 7人 2 3 1 5 計 15	S級1 A級3	
26	◎部に昇格(4月) ・百道海岸に定着	安東先生	2回 岡 藤	3年 3人 2 6 1 4 計 13	S級1 A級3	百 道 ↓ 九大艇庫 ↓ 名 島 (1回小山田宅 に機装品保管)
27	・志賀小学校合宿で、食あたり、 下痢のまま、国体予選出場 修猷館に近差で惜敗。 ・部員数も増え、活気みなぎる。		3回 坂 川	3年 6人 2 4 1 8 計 18	S級1 A級4 ※ペンギン (1回波多江氏 製作中)	
28	・国体予選にて、快走にもかかわ らず失格に泣く。(スナイプ級)		4回 高 田	3年 4人 2 8 1 1 計 13	S級1 A級2	
29			5回 伊 香 賀	3年 8人 2 1 1 4 計 13	S級1 A級2	
30	・名島合宿にて、A級沈。沈上げ の、坂川(OB)、大寺、雁の 巢米軍キャンプまで流される。		6回 大 寺	3年 1人 2 4 1 2 計 7	S級1 A級2 (廃棄)	
31	◎A級新艇進水(前田造船所)		7回 大 島	3年 1人 2 10 1 6 計 17	S級1 A級1 (大破) (新艇) S級1 (新規借用)	
32	・国体予選で、西南高に惜敗。 ・階段下の部室 (部費 3万円)	8回 渡 辺	3年 9人 2 6 1 5 計 20	S級1 A級1 (他に老朽 艇あり)		
33	◎11月3日、10回生 末永氏 練習中遭難	9回 関 本	3年 7人 2 3 1 3 計 13	S級1 A級1		

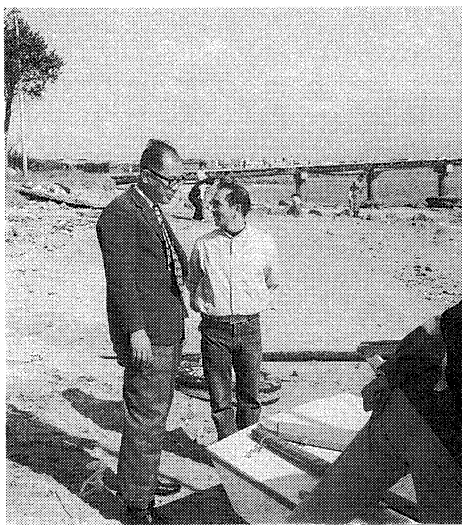
年度	記 事	顧 問	監督・ コーチ	主 将	部員数	艇	艇 庫
34		青柳先生	監督 8回 渡辺 (本昭)	10回 木村 (本昭)	3年 3人 2 3 1 4 計 10	S級 1 A級 1	名島 (九大艇庫横)
35	・名島海の家で合宿			11回 栗原	3年 3人 2 4 1 6 計 13	S級 1 A級 1	名島 (艇装品は近くの13回末藤宅のガレージ)
36	◎S級「00」進水(前田造船所) ・3年生全員退部			12回	3年 4人 2 6 1 3 計 13	S級 1 A級 1 (新「701」)	
37	・名島海の家で合宿、食中毒事件 (部費 7万円)	山田先生		13回 安河内	3年 7人 2 3 1 5 計 15	S級 1 A級 1 ペンギン 1	
38	◎国体初出場(スナイプ級～山口県光市) ・百道(ピオネ荘)で合宿			14回 助広 (上野)	3年 3人 2 5 1 7 計 15	S級 1 A級 1 ペンギン 1	
39	◎A級「502」進水(岡崎造船所) ◎S級「703」進水(") ・S級国体出場 A級インターハイ出場(13位)	岩石先生		15回 波多江	3年 3人 2 7 1 5 計 15	S級 2 A級 2 (新「703」)	名島潮湯
40	・志賀島朝日屋裏の幼稚園で合宿 ・S級インターハイ(鹿兒島)出場			16回 藤本	3年 8人 2 5 1 9 計 21	S級 2 A級 2 ペンギン 1 ※大学などから借り、 5～6艇で練習	名島(スロープにバラック)
41	◎A級「505」進水(奥村造船所) ・S級、フィン級国体出場(大分)			17回 坂本	3年 5人 2 9 1 8 計 22	S級 2 A級 3 ペンギン 1	香椎片男佐浜 (松の木を柱としたバラック)
42	◎香椎片男佐浜にプレハブ艇庫完成(西鉄所有地) ・S級インターハイ出場(滋賀) ◎S級「ぼんくらI世」進水(奥村造船所) ◎OB会発足			18回 石橋	3年 9人 2 8 1 4 計 21	S級 3 A級 2 (新「ぼんくらI」) ペンギン 1	香椎片男佐浜 (プレハブ艇庫)
43	・志賀島幼稚園で合宿 ・フーテン鍋がはやる ・A級、FJ級インターハイ出場 ・フィン級国体出場 (部費 12万円)	桑野先生	監督 8回 渡辺 (コーチ) 清水 石橋 安松 木下 平野	19回 高須	3年 8人 2 5 1 8 計 21	S級 3 A級 2 502, 505 (修理艇 501?) インターハイ出場時 FJ貸与 ペンギン 1	

年度	記 事	顧問	監督・ コーチ	主 将	部員数	艇	艇 庫
44	<ul style="list-style-type: none"> ・春のほとんど全チン事件 ・芸工大、九産大と共に練習の期間あり。 ◎S級「ぼんくら2世」進水式（奥村造船所） ◎「かざいと」創刊 	桑野先生 ↓	監督 8回 渡辺 (コーチ) 18回 石橋 〃 安松 〃 木下	20回 百 田	3年 5人 2 6 1 8 計 19	S級 3 A級 3 (ぼんくら I (505 703 (502 701 314 白フィン	香 椎 ↓
45	<ul style="list-style-type: none"> ◎S級 インターハイ 優勝 A級、FJ級 〃 8位 ◎S級 国体 2位 ・S級「ぼんくら3世」 田辺氏より寄贈 	野上先生 ↓	監督 磯野氏 (福大OB)	21回 伊 藤	3年 6人 2 6 1 10 計 22	S級 4 A級 2 (ぼんくら I (505 〃 II (502 〃 III FJ級 1 703	↓
46	<ul style="list-style-type: none"> ◎S級 インターハイ 3位 FJ級 〃 9位 ◎S級 国体 優勝 	↓	監督 加賀田氏 (西南大OB) (コーチ) 20回 真名子	22回 久 保 山	3年 6人 2 4 1 5 計 15	S級 4 A級 2 FJ級 2 フィン級 2	伊 崎 ↓
47	<ul style="list-style-type: none"> ◎百道へ移る。西南艇庫横に船台設置。 ・S級 国体出場 7位 フィン級 〃 28位 	↓	〃 (コーチ) 18回 石橋	23回 豊 原	3年 4人 2 4 1 1 計 9	S級 3 FJ級 2 フィン級 2	百 道 ↓
48	<ul style="list-style-type: none"> ◎S級 国体出場 3位 ◎1月 8日 13回 伊藤完治氏逝去 ◎3月 29日 4回 高田政昭氏逝去 ◎4月 29日 20回 壇 雅真氏逝去 	永島先生 ↓	〃 (コーチ) 20回 竹園	24回 西 (泉)	3年 5人 2 2 1 5 計 12	全艇焼失 ・県連より艇貸与 S級 FJ級 3	↓
49	<ul style="list-style-type: none"> ◎西南艇庫火災のため、ぼんくら1世・II世をはじめ、全艇を焼失。 ◎大岳艇庫建設。 ・S級 インターハイ出場 17位 FJ級 〃 〃 6位 ・九大艇庫で合宿（福岡：小戸） (部費 12万円) 	↓	〃 (コーチ) 20回 竹園 21回 真鍋	25回 宮 下	3年 2人 2 2 1 3 計 7	S級 5 FJ級 5	大 岳 ↓
50	◎4月4日 1回 堀田 剛氏逝去	↓	〃 (コーチ) 21回 真鍋	26回 山 本	3年 2人 2 3 1 3 計 8	S級 5 FJ級 5	↓
51	・S級 インターハイ出場 22位	↓	〃 コーチ 21回 真鍋	27回 中 尾	3年 3人 2 4 1 10 計 17	S級 5 FJ級 5	↓
52	<ul style="list-style-type: none"> ◎名島艇庫・合宿所落成 ・S級 国体出場 28位 (部費 20万円) 	↓	〃 コーチ 19回 栗田	28回 赤 坂	3年 4人 2 8 1 6 計 18	S級 5 FJ級 5	名 島 ↓
53	<ul style="list-style-type: none"> ◎FJ級「277」進水 (小野寺ボート製作所) ・FJ級 インターハイ出場 10位 ・S級 国体出場 18位 	和田先生 永島 〃 ↓	〃 コーチ 20回 真名子	29回 佐 々 木	3年 8人 2 6 1 7 計 21	S級 5 FJ級 6 (新 277)	↓

年度	記 事	顧 問	監督・ コーチ	主 将	部員数	艇	艇 庫
昭和	◎S級「ぼんくら4世」進水 (奥村ボート製作所) ・FJ級インターハイ出場 15位 ・S級国体出場 26位 (部費 20万円)	和田先生 永島先生 高嶋先生	コーチ 20回 真名子	30回 渡 辺	3年 6人 2 7 1 3 計 16	S級 6 FJ級 6 (新ぼんくらⅣ)	名 島
54				31回 宮 田	3年 7人 2 3 1 7 計 17	S級 5 FJ級 5	
55	・S級インターハイ出場 12位 ・S級国体出場 17位	高嶋先生 和田先生	コーチ 28回 川浪	32回 楠 本	3年 3人 2 4 1 10 計 17	S級 6 FJ級 4 (新ぼんくらⅤ)	
56	◎S級「ぼんくら5世」進水 (奥村ボート製作所) ・S級インターハイ出場 12位 ・S級国体出場 9位			33回 永 田	3年 4人 2 1 1 4 計 9	S級 6 FJ級 3 (新ぼんくらⅥ)	
57	◎S級「ぼんくら6世」進水 (奥村ボート製作所) ・S級国体出場 26位	高嶋先生	コーチ 30回 江藤 " 渡辺	34回 池 内	3年 1人 2 5 1 2 計 8	S級 6 FJ級 3	
58	・志賀島合宿 ・部室がプール下に移る。 (部費 20万円)			35回 江 崎	3年 5人 2 1 1 8 計 14	S級 4 FJ級 2 (ぼんくらⅣ " Ⅴ " Ⅵ)	
59	◎5月17日 8代顧問 永島 章 先生逝去	高嶋先生	コーチ 28回 十川 30回 江藤 " 渡辺	36回 山 口	3年 1人 2 8 1 6 計 15	S級 4 FJ級 3 (新585)	
60	◎8月8日 3回 大島喜代治氏逝去 ・S級インターハイ出場 18位 ・11月3日 35周年合同追悼式 (名島浜) ◎FJ級「585」進水(辻堂加工)			37回 内 村	3年 8人 2 6 1 3 計 17	S級 4 FJ級 2 (277 585)	
61	・合屋君、ラダー漂流事件 ◎4月 名島艇庫撤去 本拠地を小戸ハーバーへ移す ・S級国体出場(山梨) 26位 ◎12月31日 26回 山本真也君逝去 (部費 24万円)	中島先生	コーチ 24回 横川	38回 松 原	3年 6人 2 3 1 9 計 18	S級 5 FJ級 2 (新ぼんくらⅦ)	
62	◎S級「ぼんくら7世」進水 ・S級国体出場 26位 (部費 20万円)			39回 山 本	3年 3人 2 7 1 2 計 12	S級 4 FJ級 3 (県連より 貸与1)	
63	・7月東京にて、OB懇親会 ・"「40周年実行委員会」設置 委員長 18回 平野	中島先生	コーチ 須賀内 熊本 権丈 栗須 松原 池田	40回 中 井 (現役)	3年 7人 2 3 1 18 計 28	S級 4 FJ級 1 (ぼんくらⅣ) (585) " Ⅴ " Ⅵ " Ⅶ	
平成	◎8/12 40周年記念総会・ 祝賀会 8/13 40周年記念クルージング			1			

年度	記 事	顧 問	監督・ コーチ	主 将	部員数	艇	艇 庫
平成 2	・部員が多く活気を呈す。	荒木先生		41回 今 岡	3年2人 2 14 1 7 計23人	S級4 FJ級2 (IV~VII) (585.556)	小戸ハーバー
3	・女子FJ級、インターハイ 全国大会出場 (静岡県三ヶ日) 山口・福沢組	久保先生 (31回OB)		42回 牧 野	3年14人 2 7 1 12 計33人	S級4 FJ級2	
4	・男子スナイプ級インターハイ 九州大会出場 (沖縄県宜野湾) 古屋・高橋組			43回 取 達	3年7人 2 13 1 4 計24人	S級4 FJ級3 (県連より 624貸与)	
5	・男子FJ級インターハイ 全国大会出場 (茨城県土浦) 高橋・古賀組 ソロ7位 大場・渡辺組 デュエット4位 ◎FJ1030進水 ◎S級廃止 ◎7月20日 10回OB木村茂雄氏逝去			44回 古 賀	3年13人 2 5 1 2 計20人	FJ級4 新1030 585 556 624	
6	・男子FJ級インターハイ 全国大会出場 (富山県新湊) 井上・永星組 ◎FJ1160進水			45回 南 里	3年5人 2 3 1 6 計14人	FJ級3 新1160 1030 585	
7	・男子FJ級インターハイ 全国大会出場 (鳥取県境港) 井上・田村組 ソロ5位 ◎3月7日 33回OB永田雅之君逝去			46回 井 上	3年3人 2 6 1 0 計9人	FJ級3	
8	・男子FJ級インターハイ 全国大会出場 (山梨県山中湖) 古賀・住吉組 ソロ6位			47回 古 賀	3年6人 2 0 1 6 計12人	FJ級4 (県連より808貸与) 1160.1030 585.808	
9	・三年部員が0で苦しい時代		49回 副 島	3年0人 2 6 1 1 計7人	FJ級4		
10	◎1月6日 5代顧問若石泰忠先生逝去 ・男子FJ級インターハイ 九州大会出場 (熊本県宇土) 佐藤・津留組 堤・祝井組 ◎創部50周年事業 8月15日 記念総会、祝賀会 16日 記念クルージング	波多野先生		3年6人 2 1 1 3 計10人	FJ級4		

IV 追悼 故 岩石泰忠先生



ありし日の岩石先生（昭48.11.3）
右は5回山本OB

岩石先生の思い出

十八回 石橋 眞一

岩石先生の訃報に接し、大きな驚きと落莫の思いでおります。振り返れば、熱血・硬骨の、まさに福高にふさわしい先生でした。何事にも全力投球、手抜きを排する姿勢は、化学の恩師として、またヨット部の顧問として、多くを私たちに与えてくれました。

岩石先生は私が一九六五年に福高ヨット部に入った当時の顧問でした。この時は三年生が皆、強烈な個性の持

ち主ばかりで、そのうえまだ若かりし渡辺先輩が毎週練習にこられ、さらに故高田先輩、吉積先輩が時々加わり、活気があるというか厳しいというか超バンカラの世界でした。どう話をつけたのか名島の空地や香椎の海岸に、あやしげなオンボロ艇庫を建てたり、体育祭の全体練習時に幌付きのトラックに現役を載せて、統制委員の見張っている校門を脱出させて合宿をやったり、回航で夜中になったりと、自由奔放／アウトローな大変なOBと現役を、硬骨岩石先生は相手にしておられました。

岩石先生は人一倍責任感の強い方でした。そしてまた人一倍情の深い方でした。凜として生徒に厳しい反面、艇購入のために学校とあれほど強く交渉に当たっていただいた顧問の先生を他には知りません。またヨット部の顧問が休日の練習に付き合うというのは大変なことですが、岩石先生は愛用のカメラを持って、毎週の練習や合宿に来られていました。本当に頭が下がりました。現役とOBの奔放さに、教師としての立場からは大変な苦悩の連続だったと思いますが、一方でこんなふれあいを楽しんでおられたようにも思います。一九六六年の大分国体に福高が出場した際に、同期の藤田が学校を休んで大分まで応援に来たことがありました。すぐに帰れという岩石先生と、折角来たのだから見逃して欲しいという現役、同行OBとの間で、かなりもめたことを思い出します。この時も教師としての立場と情の板挟みで大変だっ

たと思います。しかしこうした叱られたり、衝突したり
の隠し立てのない関係であったればこそ、お互いの立場
を認め合い、心の深い部分での交流があったように思
います。

岩石先生への感謝をこめてご冥福を心よりお祈りいた
します。

故 岩石先生の思い出

十八回 北本 純 二

岩石先生の訃報に接し、深く哀惜の意を表し、並びに
ご家族の皆様にお悔やみ申します。

今から遡ること三十二年前、私は高校一年生、十六才
でした。高校入学前から福高に行ったらヨット部に入ろ
うと決心していました。というよりヨット部に入りたかつ
たから、福高めざして頑張ったと言って良いでしょう。
そのくらい当時私はヨットに憧れていました。同じク
ラスの荒木がすでにヨット部に在籍しており、彼に連れ
られて名島の艇庫に行きました。そしてそこで見たもの
は、艇庫とは名ばかりの、海岸のスロープの上にあるブ
ロック塀に張り付くように建てられた、電気もなければ
水道もない、十坪くらいの掘っ建て小屋でした。

しかしそこでは既に二十人くらいのヨット部員がにぎ

やかに出艇準備をしていました。その中で部長の藤本先
輩の声が大音量で響き渡っていました。

「今日は渡辺さんと一緒にガンセキもくるげなぞ。」

……：がんせき？がんせきて誰かいな？

そう思って荒木に尋ねると

「顧問の岩石先生たい。」

という答えが返ってきました。そして名は体を表すかの
ごとく岩石（がんせき）みたいな顔の先生がやって来ら
れました。

その後も先生は、時間を取ってはヨット部の練習によ
く顔を出されていました。

「こら／＼船ばもつと寄せんか、乗るとに足のぬれろが。」
と言う声に私は腰まで水につかりながら、必死に船を岸
につけていました。

夏の志賀島の合宿にも顔を出されて、合宿最後の日、
船を名島に廻航するとき、私の船に同乗されました。そ
の時、先生は船が揺れる度に

「こら／＼北本、船ば揺らすな。」と言われるので、

……：船は揺れるもんで、俺のせいじゃない

と心の中で小さく毒づきながらも、必死にローリングを
押さえながら、いくばくかの怒りも押さえていました。

また、先生は胸に抱えたカメラをタオルに巻いて、
「こら／＼北本、波ばよけれ。カメラに波がかかろうが」
とも言われ、

……いちいち波はよけれん。ヨットやけん波くらいかぶろうもん。

と思ひながらも必死になつて波をよけていました。

学校の廊下で出会つたら、肉厚の大きな手で私の頭をはたきながら、

「こら、北本、お前成績の悪かけなね。もっと勉強せいや。」

と、先生の愛のムチは痛かったです。

正月に部員揃つて年始の挨拶にいった時、先生に大いに歓待していただいた上に奥様の手作りのカキフライがとてもおいしかった事、よく覚えています。

五月の新人戦は小雨の降る肌寒い日でした。レースが終わつて船からおりると、先生が寄つてこられ、

「寒かつたらう、これば一息に飲みやい。」

と言つて、手渡してくれたのは、なんと、サントリールドでした。

……先生が高校生に酒ば飲ましていいっちゃるか？

と一抹の不安を感じながらも、いっきにグラス一杯のウイスキーを飲み込みました。喉元を落ちていくほどの暖かい液体がだんだんと熱をおびていき胃に届く頃には、体の中からぽーっと暖かみが広がつていったのを、今でも忘れることができません。きつとその日の天候を見て、近くの店で買ってこられたのでしょうか。一本のサントリールドのポケットビンのなかに詰まつた先生の暖かい優

しさがヨット部員の心の中でいっばいに広がった瞬間でした。

先生にお世話になつた私も、既に当時の先生を越す年齢となつてしまいました。が、それまでに出会つた人々のことが大きく膨らみ、又、逆に消え去つていく中で、岩石先生のこととは私の青春の思い出の中で、小さく消え去つて行くものでは決してありません。

きつと先生は天国から

「こら／＼北本、けなししようとや、ほめようとや、そげん人のことば、ほめんでもよかぜ。」

とおっしゃつておられるでしょうね。……ほめよるとです。

……「ヨット部のあるけん、福高たい。」

……「がんせきのおるけん、ヨット部たい。」

そんな時代もありましたね、……先生……合掌。

海の香り

十九回 高須修平

日に焼けた顔をした三人の若者が、赤い胴のボートの上で身体を盛んに上下させているのが見える。

「早よう汲まんと、本船が沈するじえ」、「閑伽くみんときは、俺、酔うとですよ」……ときどき、こんな声が聞こえる。

このボート、彼らの間では、『赤本船』と呼ばれている。

この赤本船には、他に二人の人影が見える。舳の近くにマストに横してボートのオールを立て、それに、しがみつこうようにして何やらノートに書き込みをしている、先ほどの三人の若者よりちょっと年長の若者が一人。それに、年の頃四十から五十の赤ら顔の男性が一人。首から双眼鏡を下げ、ときどき、これをもたげては遠くを覗いている。「また、Sがダントツやね。速かねえ。」言葉数は少ない。

この男性、若者の間では『ガンセキ』と呼ばれたり『岩さん』と呼ばれている。

昭和四十年代初めのころの、九州地方の小さな湾の東の端の海上での光景である。

この湾は、朝になれば朝風が訪れ、日中気温が上がれば海風が吹き、夕になれば夕風が規則正しくやってくる。

波の立ち方にも癖がなく、波のリズムと身体のリズムが調和したときの何とも言えない快感が、この若者たちを今日も海上に連れ出す。

三十年たった今、かの若者だった一人がこの湾に佇んだとき、彼はあの時と変わらない波長のリズムと海の香いを聴くことができる。それは、五感全体で感じる「海の香り」といってもいい。

彼にとって、瀬戸内の海とも、近畿の海とも、関東の

海とも異なる、この湾独特の「海の香り」なのだ。

そして、彼が感じる「海の香り」には、赤本船や関伽くみをする若者たち、マストにしがみついてノートをつける若者、「ガンセキ」先生、それに、風に負けずに交わされるそこでの様々な会話が、波のリズムと共に織り込まれているのだ。

岩石先生 どうもありがとうございました。

安らかにお眠りください。



昭48.11.3 追悼式(志賀島)にて 右から3人目が岩石先生

V 現役の詩

活動状況について

福岡高等学校ヨット部顧問 波多野 泰彦

ヨット部が創立五十周年を迎えられましたことに、心からお喜び申し上げます。

今年（平成十年）四月に顧問になったばかりですが、五十周年ということで改めて部の歴史と伝統の重みをひしひしと感じているところです。

さて、平成十年度の部員数および現在までの試合の結果をお知らせします。

〔部員数〕

三年 男子六名
二年 男子一名 女子一名
一年 男子四名
合計 十二名

〔試合結果〕男子FJ級

福岡県大会

ソロ 堤・祝井組 第四位
佐藤・津留組 第六位
齊田・副島組 第九位
デュエット 第二位

九州大会

ソロ 佐藤・津留組 第十五位
堤・祝井組 第十八位
デュエット 第六位

今年は、全国大会を目標にしておりましたが、もう一步のところまで実現できませんでした。

現在の三年生は、ひとつ上の学年の部員が全くいないというハンディを乗り越えて、しっかり者の部長三年副島健太を中心によくまとまり、最後まで頑張ったと思います。三年生引退後は活動できる部員数が少なくなりますが、明るい性格の新部長二年嶋田論が元気のいい一年生を率いて、部をリードしてくれることになるでしょう。五十年という部の伝統を踏まえ、これから顧問として出来る限りの努力をしてまいりたいと思っておりますので、今後ともご理解ご支援の程よろしく願います。

簡単ではございますが、これで現況の報告とご挨拶にかえさせていただきます。

ヨット部前顧問として

前顧問 三十一回 久保 聖 志

念願の福岡県の教職員採用試験に合格し、どこの学校に赴任することになるかと不安を抱えながら発表の瞬間を待っていたのが、改装前の福高の講堂だった。発表の三十分後には同じ福高の校長室にいた。こうして母校に赴任することになった私は、当然のようにヨット部の顧問をまかされることになったのである。

一年目は非常に慌ただしい毎日の連続の中でヨットの戦績は女子が九州大会、全国大会に出場したがこれは参加艇数の関係で自動的にエントリーできたにすぎず、男子は県大会で負けて引退という状態だった。二年目はスタートでのつまづきはあったものの、県大会でスナイプ級が優勝し、沖縄での九州大会に出場した。残念ながら全国大会出場はならなかったが、私自身はじめての沖縄を楽しむことができた。三年目にはスナイプがなくなりFJ一本化となり、対応に苦慮した。そんな中でOB会に新艇を造ってもらい、また部員数も多く活気があったこともあり、県大会・九州大会と勝って、土浦で行われた全国大会に出場した。久しぶりの全国大会であり、出場できただけでもと思っていたが、デュエット（いわゆる団体戦）で4位に入賞するという快挙であった。四年

目は前年に続くべく、またOB会による新艇の建造もあったが、一艇だけの全国大会出場（富山で）となった。そして五年目を迎えた。おそらく、全国制覇した代以来の最強のメンバーが揃った今年こそ念願の日本一（デュエットで）をと臨んだ一年であった。しかし思わぬ所に落とし穴が待っていた。九州大会で二艇目がまさかの十二位（十一位までが全国大会に出場できる）。それも一点及ばなかったのである。鳥取の全国大会では、ソロでは五位に入賞という快挙であった。六年目は九州大会に三艇出場という快挙であったが、山中湖で行われた全国大会にはソロでの出場となり、前年に続き六位入賞というこれも快挙であった。七年目は三年生部員が○という部存続の危機の中で、一生懸命練習に取り組んでいたが、県大会止まりであった。そして今年度転勤を命ぜられ、福岡中央高校にお世話になっている。

七年間バタバタとしながらやってきて、もっとやれることがあったのにといい思いの一方で、いい生徒たち（後輩といった方がいいのかも知れない）に恵まれて幸せな時を過ごすことができたとの思いも強い。特に数人しかいなかった女子部員だが、各々に個性が強く、色々と衝突をしながら頑張っていた姿は印象に残っている。そんな若いOB達が、また違った形でいいからヨットのまわりに集まってきてくれたらと思っている。二十一世紀に向かってOB会を、そして現役を中心とした福高ヨッ

ト部を盛り立てていくのはそういった若いOB達になるだろう。今回の五十周年のイベントが新しい福高ヨット部の出発点になってくれたらと願うばかりである。



平8.夏 当時現役の47回生と49回生（3年と1年）小戸にて

ヨット部で得たもの

前キャプテン 三年 副 島 健 太

私がこの二年半のヨット部での生活で得たものは、何事にも変え難いものです。私は一年生の夏からキャプテンを任せられ、右も左も分からなかったヨット部の運営を続けてきました。その中で自分なりに、リーダーの存在について考えたことがしばしばありました。ある集団のリーダーになるということは、その集団の代表、つまり、集団の顔になるということでもあり、またその集団を指導する、その集団の規範になるということ、とすることもできると思います。私はリーダーである者には後者の規範になるということが必要であると思います。我が福高で、よく言われる「ルールは思いやりである。」という言葉は、正に、リーダーの存在を語っています。私の解釈をさせてもらいますと、リーダーは集団の規範と前に述べましたが、これは換言するとリーダーは集団のルールにならなければならないということです。このように「リーダー」「ルール」「思いやり」という関係が成り立つのです。つまり、私の考えるリーダーというのは、結局のところ「思いやり」です。その「思いやり」が何に対するものかという点、それはその集団であり、その集団を構成する一人一人であります。

さて、現在の日本にこのようなリーダーが居るでしょうか。巷で次期首相には誰がよいかと聞いたところ、小室哲也氏が第一位だったと聞きます。これを聞いた限り、日本に強力なリーダーが居るとは言えません。もはや待っているだけではリーダーは生まれません。

さあみんな、社会のリーダーを目指そう。二十一世紀は私達の時代だ。

海の経験

三年 堤 幸太

約二年間ヨットをやって、自分が今までに経験したこととはなかつた多くのことを得ることができました。一つはもちろんヨットがどんなスポーツで、どんなふうに行かせ、どのように競うかということ（まだまだ知らないことも多いですが）、また一つは海についてです。ヨット部に入るまでは、海というのはただ広く青く多量に水がある所という感じでしたが、今では海というのは様々な表情を持っていて、時には穏やかで静かだったり、時には激しく荒れて全く人を受けつけなかったり、ものだという感じを持っています。また博多湾の事情や、漁業の様子、夕陽の景色など今まで見たこともないことを見て知ることができました。部活はともてきつかったで

すが終わってみて、部員全員で楽しく最後まで続けて二年間ヨットをやってよかったと思います。これからはできるだけヨットに関わっていこうと思います。

チームとして

三年 佐藤 太作

一〇三〇のスキッパーをしていた佐藤です。高校に入ってからヨットを始めて、うれしいことやつらいことなどいろいろありましたが、今振り返ってみると充実した二年半だったと思います。最後の大会となってしまった熊本での九州大会は、OBの方々の応援に応えることができず、全国大会へ進めなかったことを、本当に申し分なく思い、自分も本当に悔しいと感じました。

自分がヨットをやっていて思ったことは、ヨットは二人でやるものだけど、二人だけの力だけでは勝てないということ。チームメイトをライバルと違って互いに切磋琢磨したり、励まし合うことが、チームが向上する上で最も大切なことだと思います。

残ったヨット部のメンバーは、このことを頭のすみにもおいて、頑張っていて、次こそ全国大会へ出場してほしいと思います。ヨットをやって、本当に楽しかった。福岡高校ヨット部に入って本当によかったです。

苦しみを乗り越えて

三年 津 留 真 哉

この二年間と少しの生活は、ヨットなしでは考えられないものでした。特に二年の夏から部活動を引退するまでは、艇が全く走らなかつたり、レースに弱かつたりといった困難に直面し、逃げたいと思つたこともありました。けれど、困難を克服しようとヨットに関する本を読み、練習中も一つ一つの事柄（自艇の状態、他艇との位置、海面の状況など）を分析して、「どれがよくて、どうすればよくなるか。」をスキッパーと話し合うことで、以前よりもずっと成長することができました。また、困難を克服していった自信のおかげで、県大会では、苦境に立ってもあきらめずにいられたのだと思います。九州大会では苦手な〇（二m）／Sの微風で結果を残せず、インターハイ出場は逃しましたが、自分としては満足しています。OBの皆様には様々な形で支援して頂き、本当にありがとうございます。

三年間を振りかえって

三年 祝 井 健 志

最初は乗るだけでよかった。ただヨットに乗っていること自体が楽しかった。あれは二年の頃だったかな、いつしかレースで勝つことを意識するようになっていった。しだいに練習量が増えていった。すごく毎日がきつかったしいやなこともあったけど、自分がうまくなっている実感できるのがうれしかった。冬の新人戦ではじめてトップの方を走って上マークを回って後ろをふり返った時、たくさんの色彩やかなスピンをみて興奮を覚えた。「あれが一着ならどんなにすごいだろう。」その時からずっとそう思っていた。結局引退するまで一度もレースを一位でフィニッシュできることはなかった。今でもそれだけがすごく心残りだ。

僕らの代は皆九州大会止まりだったけど、来年には新艇ももらえるだろうから、ぜひ全国大会を目指して頑張っしてほしい。僕のこだわった一位になること、つまり勝つことも大切だけどそれ以上にヨットを楽しむってことを忘れないでほしい。

最後に、OBの方々、様々な御支援を有難うございました。OBの方々の納得するような成績は残せませんでした。OBの方々の納得するようになつたつもりです。これから

は僕もOBとして現役の人達がよりよい環境で練習できるようにできるだけのことをしてあげたいと思います。

秋の足音

三年 齊田 涼平

夢を乗せて走る船 未来への旅
通り過ぎる雲の色 思い出の日々

駆け昇る飛行機雲 虹を追い抜き
舞い上がる蜃気楼 風を掴む

浜に響く蝉の詩^{うた} 青より青く
肌を撫^なでる風の息 白より白く

波間に揺れる夏の日々 心に寄り添い
もう戻れない過ぎた日々 心に溢れる

嬉しい事や悔しい事がたくさんあった。県大会、二位でフィニッシュした事。九州大会、男女あわせて一位でフィニッシュした事。一番後ろを走った事。三年間、一度も自分の力で九州大会に行けなかった事。

みんなと一緒にヨットができて本当によかった。同学

年には迷惑ばかりかけたと思う。たくさんした後輩達に囲まれて幸せだ。先生、三年間お世話になった割には、子供のままですみません。OBの方々、暖かく見守って下さって本当に有難うございました。そして副島、泣いて笑って喧嘩して楽しかったよ。

「夏は終わったなあ。(反町^{そりまち}齊田)」



平8.11.3 能古島 渡船場にて 現役(当時1年の49回生)

(前列) 左から 祝井、津留、副島(キャプテン)、堤

(後列) 岡田、大石、衛藤、齊田、佐藤

誇り

二年 嶋田 諭

福高にヨット部が創立され、五十年もの月日が経ち、非常に多くの方々がヨット部に携わってきたわけですが、自分がこの由緒ある部に所属し、活動できることを誇りに思います。又、日頃の練習において福高は他校に比べ、不利な状況にあるとよく言われますが、その分他校に例を見ない熱心で親切な先輩方が練習を見て、そしてアドバイスしてもらい、感謝しています。自分は、先輩や、OBの方々の熱意に応える為、今後の練習に励んでいきたいと思っています。

一年 清水 紘 太

僕がヨットを始めたのは小学校2年の時だ。おじにすすめられなんとなく始めたが、今では練習が楽しい。先輩はおしくも九州大会で負けてしまったので、僕たちはインターハイ出場を目標にがんばっていききたい。

一年 黒木 旭

自分はまだはっきりと目標をもっていないけど、三年



生の先輩に学んだことをこれからの部活動に生かしてが
んばっていききたいです。そして、その中で自分の目標を
見つけていきたいです。

一年 井上 修治

僕の今からの目標は、新人戦で全国大会に出場するこ
とです。そのために、三年生が引退して、先輩が一人に
なったので、先輩に教えてもらいながら、なるべく一人
で練習していこうと思う。

一年 加治 真

僕は、六月にヨット部に入った。他の一年生の部員と
は、二ヶ月分の差がある。だからこれからは、部活をさ
ぼらず一球入魂でがんばりたいと思う。そして、僕は全
国大会出場を目指し、日夜練習に励みたいと思う。



昭49.3.13 春の総会（奈良屋 観音寺にて）

編集後記

久しぶりに「かざいと」の編集をした。五十周年記念号である。写真集めに苦労したが、五回山本先輩、二十回大隈先輩の御協力によりめずらしくも、又懐しい写真の数々を、つくづくながめる機会を得た。

そのうちの一枚、山本先輩の字で「S四十九・三十三」と、手書きでざくっと日付がはいっている。ありがたい。確か奈良屋町は観音寺での春の総会である。小生は当時大学一年生、他の在福の先輩方も若々しく本心に懐しい。

我OB会は、トップOBから若手まで、ワイワイ言いながら、とにかく数よけい集まり、話し合いを重ね、事業にとりくみ、現役を応援してきました。

今回の五十周年事業も、二十二回田代君を、実行委員長として、両手であまる回数 of 打合せを重ね準備を進めて来ました。それぞれの得意分野を活かして、知恵の寄せ集めです。OBの皆さん方からの度重なるご協力を得ながら今一步のところまで来ています。

今後共、トップOBから若手まで、変わらぬご協力をよろしく願います。

事務局長の三十一回井手君のピンチヒッターとしてご挨拶まで。

平成十年七月三十日 二十一回 齊田

福岡高校ヨット部 創部 50 周年記念式典・祝賀会

式次第

- 一、開会挨拶
福岡ヨット部五十周年実行委員会
実行委員長 田代 剛
- 一、会長挨拶
福高ヨット部OB会
会 長 平畑 栄一
- 一、校長挨拶
福岡 高 校 長 野見山 義隆 様
- 一、来賓挨拶
福岡県ヨット連盟
会 長 柳ヶ瀬 勉 様
元顧問 初代顧問 志賀 史光 様
- 一、新艇目録贈呈
- 一、謝辞
- 一、乾杯
福岡県ヨット連盟
副会長 秋山 雄治 様
- 一、歓談
- 一、祝い目出度
- 一、博多手一本
- 一、閉会



俺とお前

- 一、俺とお前とはよ
厚い友情でよ
福高のヨット部で
結ばれたよ
- 二、船は出て行くよ
残るオイラのよ
煙は残るよ
日に涙よ
- 三、オスラバリバリでよ
頑張ってくれよと
別れたよ
- 四、吹くな春風よ
俺が卒業よ
散らすな華をよ
するまではよ
- 五、どうせ死ぬならよ
浪の華さくよ
浪の華さくよ
浪の華さくよ
千尋の海でよ
青い海でよ
青い海でよ

50th Anniversary

福高ヨット部讃歌

- 一、玄海灘に生まれたる
ヨットマンなら
男なら
太平洋に夢はせて
福高男児
ふるいたて
- 二、はらむセイルを
なお引けばきしむ
マストのこちよさ
腕まえ見よと
タックジャイブ
夕日が沈む
志賀島

坂口 幸雄 詩
吉野 信夫 曲